

大東亞建設民族人口資料二八
昭和十七年三月三十日

ア
ジ
ア
の
諸
民
族
(第一分册)

厚生省人口問題研究所

B. 50. 41
90
1-28

M93A05
18

序

本輯は調査研究の參考に資する爲、バックストン著「アミアの諸民族」(Buxton, L.H. Dudley, M.A., F.S.A. "The Peoples of Asia." London. Kegan Paul. 1925.) を本研究所小山榮三、河野和彦をして翻譯せしめたものである。尙、本輯は早急の間に取纏めたものであるから粗漏なきを保し難いが、將來版を改める際補正することゝしたい。

昭和十七年三月

厚生省人口問題研究所

アジアの諸民族 (第一分冊)

目次

序 言	一
第一章 序 説	五
第二章 アジアの諸民族	六
第一節 人種地理	六
第二節 白色人種と褐色人種	六
第三節 黄色人種	六
第三章 アジア諸人種の起源	七

アジアの諸民族

序言

アジアの諸人種について有用な知識を蒐めんとする人は、種々の權威によつてものされた言語の多いために他の研究に於けるよりはとりわけ錯雜な問題に當面してゐる。東アジアの人種學の母胎たる廣大な量に上る支那語文獻は通常の人類學者には未開の寶庫となつて居り、西歐の學徒は其れを一層馴染み深い言葉に翻譯し始めたけれども、依然として未開の寶書を開くに熟達した將來の支那學徒の手に委ねられてゐるであらう。支那地理評論と云ふ極めて興味ある人種學的出版物として、既に支那及び外國人の研鑽によつて其の仕事は始められてゐる。日本の出版と同様に其の大抵の出版物は土着語と若干のヨーロッパ語で書かれ、それ故廣く社會に提示されてゐる。一方、部族名、地名を記號や音譯を使つて用ひ、單なる音譯のみ與へられる場合に起し勝ちな錯雜さを回避してゐる。

然し乍ら、西歐の言葉に於いてすら、此の問題に關する文獻は廣大であり常に増加しつゝある。私は私の研究に於いて最大の貢獻を與へて呉れた書書を文獻として示して置いた。それ故、讀者はそれに眼を通されることにより少くもアジアの各地域に關する大部分の専門的な文獻を跡づける事が出来るであらう。可成り著名なものも容易に手にし得べき書物となつて公刊されてゐるから、一層關心を持たれる讀者は偉大な文獻に至る途を知られることと思ふ。私自身の經驗から見て、研究者の屢々手にしてゐる文獻が研究對照に於ける最も有用な研究を呈示してゐないこと程、根本的な研究家にとつて嫌やな思ひをする經驗はないと考へる。或ひはたとへ提示してあつても、完全には理解され

ない言葉で書かれてあることもある。それ故多くの場合私は原語論文を英語、フランス語又はドイツ語で要約しておいた。之は初學者に彼が要求してゐるものを與へてゐるであらう。更にもう一段進んだ學徒には充分な研究への踏石となるであらう。

私は内外の極めて多數の學者に負ふてゐる所の善のを適切に表現することが出来ない。私の兄事するアーサー・トムソン教授、オックスフォード大學に於る人體解剖學教授リー博士は私の研究に限りない援助と懇切な忠言・批判を與へて下さつた。ピットリィバス博物館の管理者ヘンリー・バルフォア氏(F・R・S・C)は其の博學識見を以て私を絶えず援助して下さつた。此の書は氏に負ふ所誠に大である。マイアー教授は始めて私にアジアへの眼を開いて下さり、更に重要なことは私に現地調査の機會を與へて下さつたのである。私は彼が教示して呉れたことを忘れないであらう。マレット博士に對して私は特に人類學記述の技術の點で負ふ所大である。國外では北京に於るロツクフェラー教會のブラツク博士に感謝する。而も研究所長は私を臨時幹部の一員とし研究室を利用する事を許してくれた。足立博士は時々彼の指導下にある京都帝國大學の數多い蒐集物を吟味する機會を與へて下さつた。ニューウエンフウイス博士は個人的又は代理として私に力を借して下さり、ジャバ中を案内して下さつた。此の長期の旅行を企てる機會はカーンの獎學資金によつて與へられた。私は亦、北京に於る多數の支那人及び蒙古人の學者に等しく感謝する。之等の寫眞の或るものは、彼等自身の民衆及び其の友邦民衆、——アジアの遠隔地に於る居住者——此の廣大なる大陸の異つた人種型の或るものを現してゐるので此の書の中に利用して置いた。

確かに之等の學者は老いざれば此の廣大な研究題目に向つて限りなく研究の歩を進めねばならぬとお考へになつてゐられるであらう。私程、之がアジアの肥沃な土地の單なる第一の收穫(Vindematio Prima)に過ぎないと考へて

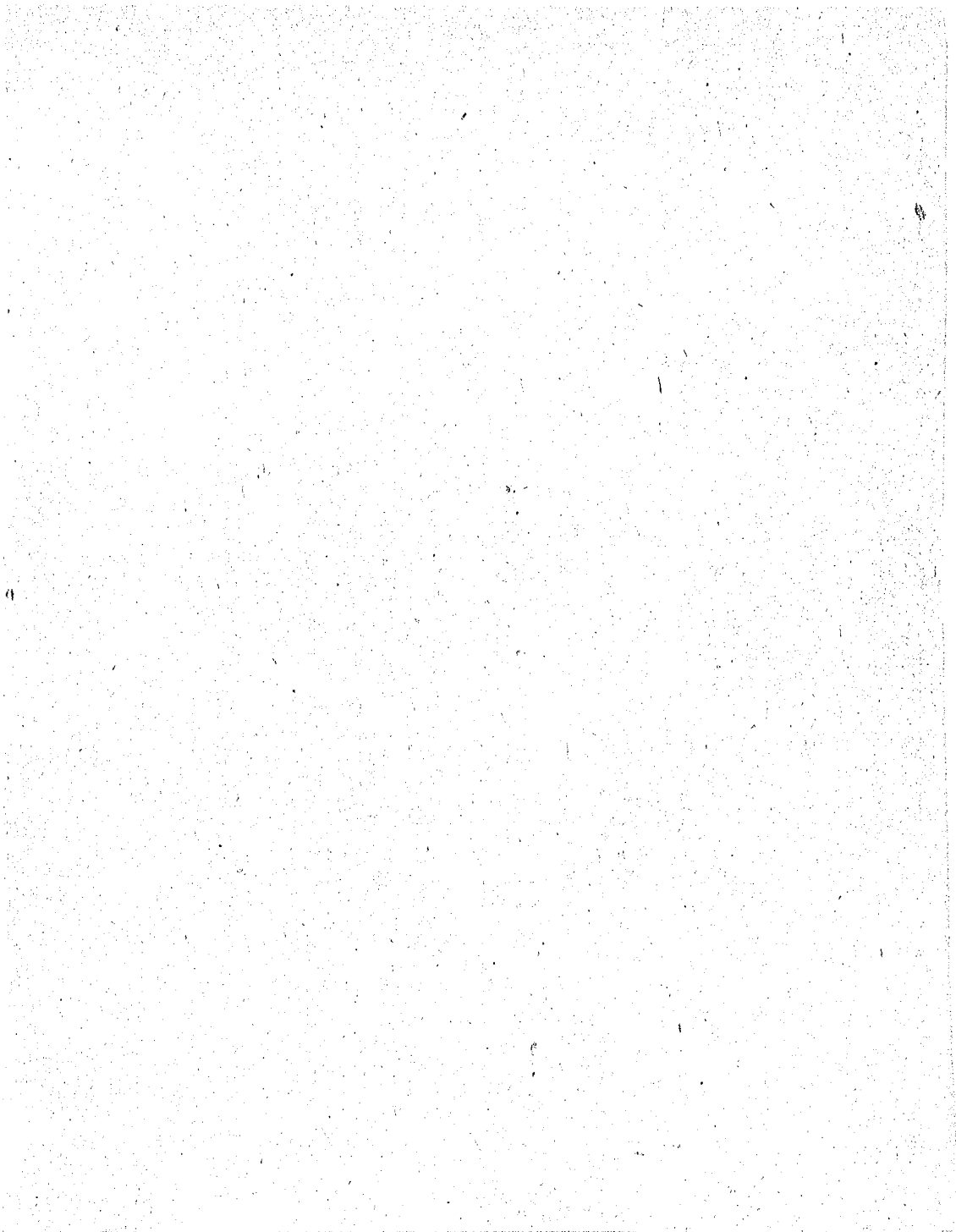
ゐるものはない。私は斯る乏しい拾遺ですら、豊富に發見される寶物を積み重ねんと準備されてゐる他の人に資せられんことを願つて筆を執つた。限られた紙面では既に公刊された此の問題に關する研究の一般的傾向を支持する以上に出ることは不可能であつたし、私が一、二の場處でなし得た最初の研究の若干を諸所に附け加へることも不可能であつた。

私の父ダッドレイ・バクストン博士及びG・R・カーリン氏は原稿を通讀して下さつた。私はその慎重な校正に負ふ所大である。チャールス・ヘンダーソン氏(I・A・C・S・)は原稿及校正刷に於ける印度の章を、アーメスト・トーマス氏は近東の章を讀んで下さつた。私の學生たるクイン・カレッヂのフレージャー氏は索引に多大の勞を費された。オックスフォード人體解剖學教室助手チエスターマン氏は私の寫眞の中から出版用の圖版を準備してくれた。上記の人々及び何時も私を助けてくれた方々に對し私は深甚なる感謝の意を表したい。

一九二五年六月

オックスフォードにて

L・H・ダッドレイ・バクストン



第一章 序 説

人類學を研究するに際して何よりも先づ最も困難な問題の一つは、研究者自身に直面してゐる數多の人類をどのやうに區別するかと云ふ問題であり、従つて其の區別すべき規準を何處に求めるかと云ふことが解答を迫つてゐる。多くの斯る規準は過去に於ても提案され、又様々に認められて來た。それ故特別に制限された地域以外の、何等かの地方を取り扱つた大抵の書物は同一の分類基礎が一貫してゐない結果、極めて錯雜した内容を持つ傾きがあるのである。或る場合には著者は一般に認められてゐない規準を用ひてゐるので、同一分野に於る他の研究と殆んど比較し難い事になり、有用な研究であるかどうかを立證し難いものとなつてゐる。

傳統的な人類の分類は肉體的なものか、或ひは文化的なものかに依存してゐる。ヘロドトスは肉體的なものを提案せる最初の人類學者の一人である。彼は或る戰場でエヂプト人とペルシヤ人の頭蓋骨を區別することは、前者が比較的容易には破壊し難かつた爲に可能であつたと述べてゐる。此の陳述は現在の教科書に於いてすら廣く認められてゐる所であるが、遺憾乍ら正しいものではない。アリストテレスも亦、ギリシヤ人は野蠻人と異ると (*barbaroi*) 云つてゐる場合、肉體的な規準を受け入れて居たのであらう。然し乍ら彼は疑ひもなく醫學の一分岐を考察してゐたのではなかつたから、解剖學的な差違と云ふよりは寧ろ心理學的な差違を意味して居た様に思はれる。

人種標準としての言語も亦、廣くギリシヤ人によつて認められて居たし、ホーマーの時代ですらカリヤ人は野蠻語を語るものとして分類されて居る。此の分類形態は極めて廣範に人類學者によつて認められて來た。其れは疑ひもなく、十九世紀の初めに比較言語學者によつてなされた急速な進歩に基づくのである。モンゴロイド人種の場合には肉

體型を、セム族の場合には親縁語を語るものとする時に、我々はセム語を語つてモンゴロイド人種を意味付けてゐるのである。國民性も亦屢々人種標準とされたけれども、此の規準は言語學的なもの程廣く受け入れられる所とはなつて居ない。此の書に於る分類基礎は肉體的なものであつて、出来るだけ言語學的な、國民的なものは避けられて居る。だが現在、全く新しい一聯の名前を鑄造する事に依る以外、斯る言葉を全的に抽出する事は妥當ではない。トルコとかアラブとかいふ言葉は肉體的な意味よりは寧ろ言語的な或ひは文化的な意味を持つて居るのであるけれども、我々はこれ等の言葉を避ける事は出来ないのである。

人類の分類史は現在に於ても大なる意義を持つてゐる。それはさもなくば屢々混亂に陥りがちな正確な意義を説明すると同時に亦、一定の言葉を現在何故に用ひてゐるかに就いての理由を記述するものである。

ヘロドトス及びアリストテレスの事は既に述べた所である。西ヨーロッパが古代世界から贈られた人種學の問題を再考し初めたのは、十七世紀初頭になつてゐた。一方では多くの比較資料がエリザベス時代の航海者によつて集積されたのであるが、水夫達は古代世界には知られなかつた新しい型の野蠻人に就いて簡潔な考察を齎したのであつた。

文藝復興以來提案されて來た多くの人類分類を詳細に考察することは必要ではない。讀者はキーン(A. H. Keane)の民族學のに充分記述されてゐるのを見出されるであらう。然し乍ら一層重要な問題がアジアに關する限りに於て述べられるかも知れない。一六八八年に死んだベルニエは人類に四つの主要な系統があると提案しゐる。即ち白系たるヨーロッパ人、黒系たるアフリカ人、黄系たるアジア人及びラツプ人が之である。殆んどそれから一世紀後にリシネ(C. Linnæus)(一七八三年死亡)は三つの同様な主要集團を依然として採擇して居るが、毛髮及び眼の色を其の中

に含めて居る。其の結果アジア人は褐色の眼と黒色の毛髪を持つた黄色人として分類されて居る。彼は亦、アメリカ人を第四の集團として含めてゐるけれどもラップ人を獨立人種から除外してゐる。

然し乍ら我々が眞に近代人類學の基礎として恩恵を受けて居るのはブルーメンバツハ③ (J. F. Blumenbach.) であつて、彼の使つた術語の或るものは今日でも生き續けて居る。彼の人類學研究への貢獻は次の如くダックワース④ (W. L. H. Duckworth.) に依つて要約されてゐる。彼は記述的形態學研究に於て人類學と云ふ言葉を始めて採用した人であつた。彼は人類の持つ數々の多様性を鋭く一線を以て劃すると云ふが如きことは困難であり、類型から類型への推移にしても殆んど判らないと云ふ事實を認識して居つたのである。更に彼は種々雑多なる人類の分類構造を明確に述べたのであるが、其の分類の基準は皮膚、毛髮、頭蓋骨の特性に求められてゐた。結局、彼は人類を含めて動物に於る連續的永續的變化に外的原因の影響の存することを既に認めてゐた。最後に彼は人間を含めて動物には、變化を作り出し繼續させる外的原因の影響のあることを認めた。彼は亦、退化による變動の期限を認めて居つたのであつて、極めてダーウイン説に近い見解を持つてゐた。

彼の使つた用語は今日も亦使はれてゐる。彼は白色人種をコウカサス人種と呼んだ。其の理由は、彼が偶々吟味した若干の頭蓋骨の中にジョルジア人の立派な頭蓋骨の若干があつた事から、それ以後其の人種をコウカサスと云ふ名で呼んだのである。アフリカのエチオピア人に對して彼が使つた用語は今日の所では残つてゐないけれども、モンゴールと云ふ用語は未だ使用されてゐる。近代人類學は、彼がマレーに對して分類した所のものを認めては居らな

5。

次の八十年代になると人類學に關する巨大な數に上る勞作が發表されたが、此れ等のものは此所では論ずる必要は

ない。だが一八七〇年、人種學界誌^⑤に發表されたハックスレー(T. H. Huxley)の分類は極めて興味あるものである。彼の分類の中には、其の主要な論議の跡は異つてゐないけれども、ブルームンバツハ以後の分類よりは一層綿密な調査の結果が餘り豊かな精密な分類を齎してゐる。彼はネグロ族の下にネグリート族を包含してゐるけれども、近代の研究者と異つて彼は其の名の下にアンダマン族、パプア族、タスマニア族を一括してゐる。彼の第二の分類たるアウストラロイド群も亦、我々の目的上興味あるものである。これらのものの中には、オーストラリア現住民、デカン高原種族(ドラヴィダ族)及びエヂプト人が含まれる。彼のモンゴロイド集團はラツプランドからシナム迄のモンゴール人、マレー人、インドネシア人、ポリネシア人、エスキモー人、アメリカインディアン等を包含してゐる。彼の試みた明白人種集團は現在の考察に入り來るものではないけれども、暗白色人又はメラノクロイド群の下に彼はシリア、アラビヤ、ペルシャ、及びヒンドスタンの住民を含めてゐる。

ハックスレーの分類以後、三十年程の中に種々なる分類が試みられたが、其等の中、大抵のものは、微細なる點でハックスレーの分類とは異つてゐるものがある。或る場合に於ては異つた基準を使用してゐると云ふ事が重要である。皮膚の色と毛髪とが全體として昔の研究者の分類基準となつてゐたが、一層近代的な分類は、たゞ毛髪のみによつて爲さんとしてゐる。トビナル^⑥(Paul Tournard)は皮膚の色と鼻形指數とのコンビネーションを該分類の中に導入し、アジアの黄色人種を黄色中鼻型として分類した。そして彼の分類は一般に追從された。

セルジ^⑦(G. Sergi)の分類は、彼が全く獨創的な分類形態たる頭蓋骨による分類を暗示したと云ふ點で重要性を持つものである。セルジはヨーロッパ人種に侵透してゐる所の短頭の要素は根源的にはアジア的なものであり、歐亞弗利加的長頭と全く相反するものであると考へた。それ故彼の分類は多くの點で、アジア人種の研究者に對してよりも

一層アフリカ人種の研究者に對する一大挑戰を試みたことになる。斯る頭蓋骨形態によつて分類を試みることは、しかし乍ら新しい方法であるのだが、彼によつて暗示されたあれこれの亞類を理解するに際して逢着する困難な問題の爲に、それは一般に廣く受け入れられる所となつてゐない。

「形態學と人類學」^四と云ふ論題の下にダックワースによつて示された分類は近代的企圖の中、最も重要性を持つもの一つである。それらは長年の間、人類學者によつて用ひられて來たものであるけれども、私の知る限りに於には一般的分類に對して廣く採用されなかつた規準に基づいてゐるものである。彼は他の動物を分類するに際して、多くの形態學者によつて用ひられたところのものと原理的に同一であつた方法を導入した。其の結果は、それ以前の觀察者の研究と多くの場合一致してゐたけれども或る差違を持つて居り、若しそれが眞實なものであるとされらば、其の結果はアジアの住民に就て我々の抱いてゐた見解の多くを根本的に變更するものとなるのであらう。彼は三つの主要な規準を採擇し、之等の規準によつて配慮された基礎の上に人類を分割する。即ち頭蓋容量(Cranial capacity)頭形指數(Cephalic index)及び顔面斜形(Projection of the face)が彼の採擇せる三規準である。斯くの如くして彼の第一集團は小頭蓋容量の人類、即ち長頭、斜顎型顔面のものを包含し、斯る類型をオーストラリア型と呼んでゐる。第二集團は同様な性格を持つてゐるものであるが、其の他の形態上の詳細な點で差違を示して居り、その型はアフリカネグロ型である。アジア民族については彼は次の如き分類を試みた。第一に、彼が歐亞型として記述せる第四集團に屬する一切の人類は大頭蓋容量を有して居り、正顎型である。之等の者は分れて二つの亞類を形成する。即ち長頭型、短頭型亞群とが之である。此の類型を持つて居る人類はヨーロッパ、北アフリカの一部、アジア全體、殆んど總てのアメリカ大陸等の住民を形成してゐる。他のアジア的集團は小頭蓋容量のアンダマン族であるが、之は短頭

型、正顎型である。之等二つの群間の大きさと、重要性とに於ける對照は極めて顯著であり、ダックワースの分類と、其れに先立つ著者達によつて爲された分類との間の相違點となつてゐる。ダックワースは、人類の大部分は同一集團に屬してゐると云ふこと、多少の相違は環境或はその他の條件に應じて特殊化されるものであると云ふ見解を持してゐたものゝ如くである。之等人類の多様性は、大抵一般に後進民族と看做される種族を包含してゐるのであつて、單に、明かに特殊化された種族たるアングマン族、エスキモー族のみならず、またネグロ族、ブツンマン族、オーストラリア原住民、及びポリネシア族も包含してゐるのである。

大抵の分類は二つの大きな差違として、白色人種と黄色人種の分類で充分であると云ふ見解に基いてゐた。所でダックワースは之等二人種の相違よりは相似と云ふ觀點の下に、之等二つの人種を分離して考へると云ふ方法を拒否したのであつた。ダックワースの細分類は亦、それがヨーロッパの短頭種族を長頭型ヨーロッパ近隣族とよりは一層密接にアジアの黄色人と結び付けてゐるが故に、根本的な重要性を持つものである。それと同様にして、或る著者は（著しくイタリア人類學派にこの傾向が見られる）地中海人種とニグロとを結び付ける傾向がある。

支那人の頭蓋及び西方アジアの圓形頭蓋を吟味してみると、頭蓋形態の近似性を表してゐるに違ひない。二つのものを區別するに、頭蓋穹隆のみの吟味を試みる事が出来るにしても、それには屢々困難が伴ふ。だが然し顔の骨格及びその他の骨組が違つてゐる事は、二つのもの間に可成りの相違がある事を暗示してゐるのである。然し乍らダックワースの規準は二つの場合に於て頭蓋穹隆に基礎を置き、従つてその相違を掩蔽せんとする傾向がある。人類の異なる集團間の關係度は未だ極めて不正確であるので、この特別の分類は大抵の著者達によつて人類に關して受け入れられて來た所のものよりは、一層の認識を與へられてゐる。それらの著者達の多くのものは、比較的傳統的な、而し

て一見より明確な分類に従ふ事に満足して來た。

リプン⁽⁹⁾ (W. Z. Ripley) は我々が上述して來た著者達と異つて、全世界の住民を論ぜず、ヨーロッパと云ふ大陸に命題を限定した。而して頭形指數即ち頭幅に對する頭長の百分率、身長、色素の三規準の下に分類を試みた。斯る基礎に立つ場合には、ヨーロッパの住民はドニケ⁽⁹⁾ (G. Deniker) の試みた六種族に分類されるのではなく、三種族に分割される。北方にはノーディックと呼ばれる明色にして身長の高い長頭人種があり、中央大山脈地帯には中庸な皮膚色と身長を持つた圓頭型人種たるアルプス人種が見出され、更に地中海沿岸にはセルジの地中海人種と一致せる所の身長の高い長頭ブルーネット人種がある。ニグロに關するリプレの見解及び特に中央ヨーロッパの圓頭型頭蓋の研究に對して彼の抱いてゐた見解には或る種の反對意見が表明されてゐるけれども、概して彼の見解は頭形指數、色素、毛髮等を分類基準としたと云ふ點で、現時に於ける人類學の領域を支配してゐるものと言ひ得られるであらう。而してヨーロッパ又はアジアの人類學研究者は、彼の輝かしくも露異的な論文の中に集められた材料を探求してみなければならぬ。

以上引用した著者達の大部分は解剖學的態度を持して來たものと云ふことが出来るのであつて、彼等はケトレイ⁽²⁰⁾ (A. Quetelet) やレイウズ⁽²⁾ (A. Reznus) 等の先達に従つて、一連の測定を試みたものではあるけれども、大部分は該問題の數理的面に興味を抱いた譯ではなく、之等先達の特質を充分利用することもなく、ケトレイによつて示された道程を跡付ける事にも成功して居らないのである。數多くの資料からの科學的研究を人類學の中に導入すると云ふ方法は全く、ピアソン教授⁽⁹⁾ (K. Pearson) に負ふ所大である。

彼の説く方法は一般に統計家や天文學者の採擇する所となつてゐたが、又生物學的問題への適用可能性も示され得

たのである。此の方面に於ける開拓者はゴルトン及ウェルソン等もあるが現存せる者はピアソンなのであつて、人は稱して「生物測定學派」と稱する。而も之等の多くの人達が人類學に可成りの關心を示したのである。此の派の者は三十年前に初期の論作を發表してゐるが、一般に受け入れられる處となつてゐない。之、一つは其の敘述の方法の比較的漠然とせる事によるべく、他は生物測定學者達が應用數學の原則に特殊的訓練を受けて居らざる事によるものと思はれる。又或る場合には解剖學的教養をうけてゐないことによる。此の派の行績を考察するに際しては、資料の數學的取扱が單に機械的であり、始めからそれに適合されなかつた仕掛けから、何等のものも生れてゐないと云ふ事が常に記憶されねばならない。だが然し、數學的方法に依つて、さもなければ取扱ひ得ないと云ふのではないにしても、極めて扱ひにくかつたであらう所の龐大な資料を位置づける事が可能であつた。

昔の人類學者は測定値を取り上げ、指折り算の方法によつて平均を算出する事に満足して居つた譯で、之等の平均が現實にどれだけの集團の典型的測定値として考へられ得るか云ふ事については、何等正確に考察する所がなかつたのである。我々は一定の大きな實際的價值概念を人類學に導入したと云ふ點で、生物測定學派に恩恵を蒙つてゐる。之等のものは便宜的に次の三つのものに求められるであらう。即ち、散布度の測定、蓋然的誤差の測定及び偶然、相關々係の理論、之である、之等の考へが此の學派に依つて生れ、此の學派に依つて人類學に導入されたと考へられてはならない。人類學的研究に於て彼等の使つたものは、以前にケトレイに依つて少しく異つた名前で提案されてゐたものである。だが然し、生物測定學派は其れ等を普遍化し、以前の研究者によつてなされた以上に其の領域を擴張したのであつて、古い方法を發展させ新しい方法を工夫したと云ふ點で人類學がピアソンに負ふてゐる所のものは、今日ですら充分と迄は認識されて居らないのである。

一定の人種がその他の人種と混淆した、即ち一定の種族が持つ構成的種幹が現象に現れた近似的特徴を表し、他の種族の場合に於ては其の起源が相互に混血し雜種の間を作り出してゐる密接な關係を持たない種族に捜し求められねばならないと云ふ事は、ヘロドトス以來、總ての著者達に依つて認められて來た所である、標準偏差及び變異係數を使用することによつてピアソンは、種々の種族の比較的純粹性を測定することが可能であることを示した。

標準偏差は平均からの平均的平方差を取る事に依つて見出される。勿論、一系列の數値の平均をとり、その平均と數値との平均的差を求めることは可能であらう。然し乍ら、現實の偏差をとるのではなくて其の等の偏差の平方を求めることによつて、より大なる正確さが獲得されることが實際に發見された。斯くて獲得された數値は散布度の測定と呼ばれてゐる。何故なら其れは、吟味されてゐる系列の様々な個體がどれ程散布されてゐるか、或ひは中心點又は平均との關係に於てどれ程バラ撒かれてゐるかを示すものだからである。若し標準偏差が小である、即ち散布度が大きい場合には、その平均は集團の中、典型的なものとなるが、若しそれが廣く散布されてゐる場合には明かに一集團内の極く僅かな個體のみが平均に近い値を持つてゐると云ふことになるのである。換言すれば我々の平均を以て人種型を表示するに際して、信頼度が少くなると云ふことになる。若し我々が人類學的測定をクリケットのスコアと比較するならば、問題は一層簡單に理解されるであらう。若し一人の打者が打ち番で零、十五及び三十を獲得し又一方十三、十五及び十七を獲得する場合、兩者は全く同じ平均を持つてゐるけれども、一は他よりも一層堅實な打者であることを認めねばならない。勿論我々が決定的な判斷を與へる前に、三つの打ち番以上のスコアを欲すべきであるけれども、その點に付いては後に説くことにしよう。我々が想像する堅實な打者は常に約十五の得點を得る。即ち彼の平均は我々が期待する平均に緊密に近附くのである。此の事は一見して觀取され得る所である。若し兩方と

も五十回プレイするならば、それは比較的容易でなかつたであらう。それ故我々はこの標準偏差を算出せねばならない。兩方の場合に於ける平均は十五であり、最初のプレイヤーの最初の打ち番は平均から十五違つてゐる。その平方は二二五である。彼の第二の打ち番は平均に等しく、第三の打ち番は第一のものと同様な偏差を持つてゐる。全平方差はそれ故四五〇である。此の平均を獲得せんが爲めには、我々は打ち番の全數即ち三で割らねばならない。その平均平方差はその故一五〇である。(三分の四五〇)平方根はまさしく十二を越える。之は彼のスコアの標準偏差を表はしてゐる。同様な方法を使つて第二のプレイヤーのスコアの平均平方差は三分八即ち一・六七である。その平方根は一・三以下となる。此の例は誇張的な形態に於て如何に標準偏差が用ひられるかを示すに役立つであらう。だが我々は單一のプレイヤーの得點に混淆人種の理論を當嵌める事は出来ないのである。

若し我々が二つの系列を混ぜ合せるならば(即ち頭の短いものと長いもの)その平均測定値はその系列の典型的な成因ではなくて、二つのものの間の合成物を現はしてゐることになり、標準偏差は大きくなるであらう。何故ならば一方に於て短頭型系列が擴大し、他方に於いて長頭型系列も擴大するからである。疑ひもなく或る場合には之はグラフに依つて現はされるであらうが、散布度測定の使用が一層便利である場合が相當ある。時として偶々我々は可成り違つた平均値を持つ測定値を比較したいと考へる場合があるかも知れない。我々は又一一定の人種が一層可變的な頭長を持つものか、それとも身長を持つものであるかどうかを知りたいと思ふことがあるであらう。此のことの爲には我々は或る共通なフアクターをとつて來なければならぬ。之は變異係數に依つて見出されるが、之は多數の標準偏差を掛け合せる事によつて或ひは平均に依つて作られたものを割る事に依つて獲得される。クリケットの論議に立ち返つて説明しよう。シーズンの終りになつてAの得點を吟味せる時にクラブのメンバーは彼が役球手であるよりは打手

に一層適して居ると云ふ見解をとる、他のメンバーはそれと反対の見解をとる。若しクラブの成員の中に生物測定學者が居るとするならば、Aの投球と打球の平均の變異係數を比較することによつて一層問題を容易に解決するであらう。そこで彼の平均打は十五である。その標準偏差は九である。變異係數はそこで十五分の九百即ち六十となるであらう。之と同様に投球平均を出す。そこで我々は二つの數値を比較し、クラブのメンバーのどちらが正しいかを決定することが出来るのである。

斯かる方法の持つ大きな價値は、一人種が何等かの共通な特徴を表はしてゐるが、他の點で異なる二つの人種の混淆の結果であると當然考ふべき場合に表れるであらう。

我々は雜種が二つの原基的系統に於て相似してゐる特徴に於ては殆んど變異を示すことなく、彼等の相異せる散布度の廣範な測定がなされると考へるべきである。此の提案は變異係數を比較することによつて測定され得る。

我々は馴染深い分析を用ふることによつて標準偏差の意味を例示することは可能であるが、蓋然的誤差の意味を説明することは比較的容易でない。若し私が野蠻な種族について行はれた一系列の測定値をとるとして、亦その次に他の系列をとるとする。そうすれば私はラプラスが言つてゐる様に、選擇の方法によつては兩方の場合について同一の結果を正確に得ることが出来ないであらうことは明瞭である、亦、個々のもの數が大なる程二つのものがそれだけ多く一致して來ると云ふことも明らかである。皆、出來るだけ大きな系列から平均を抽出することが一層良い様であるけれども、その平均が觀察されてゐる母域(Population)をどれ程實際に表はしてゐるかどうかを知ることが便宜である。之は二つの事象に存してゐる。先づ第一は母域がどれだけ變るかと云ふことであり、第二は個々のもの數がどれ程あるかと云ふことが之である。私の測定するものが大なれば大なる程、即ち標準偏差が小なれば小なる程系

列は母域の眞の平均に近くなるのである。蓋然的誤差の値は之等二つの因子から計算される。それ故其れは便利な方法で資料の信頼度を示す方法を與へてゐるのである。蓋然的誤差が大であるならば計算された平均値は警戒を要すべき値であり、若し小であるならば計算された値は眞の平均値に近づくものであらう。蓋然的誤差は、標準偏差、相関々係やその他のものの變異係數で計算され得る。偶然論及び相関々係論は同一問題を形成する二つの異なる面である。前者は測定し得ない特徴を取り扱ふものであり、後者は測定され得るものを取り扱ふ。人類學に於いてはそれは最も大なる重要性を持つものである。一つの係數が構成された。その現實の計算方法については此處で述べる必要がない。二つの變數が正しく相互の關係に於て變化するものとする。(量と質)とすれば其の二つのものには相関々係があり、その係數は計算すると一となるであらう。何等の關係がないものとするならば其の係數は零に近い値をとる。人類學的研究に於いては殆んど一もなければ零もない。それは多くは偶然的な特徴にもとづいてゐるのであるが、係數の可變的數量は二つの特徴が原因結果としてか又は同一原因の同一結果として、緊密に結び付いてゐると云ふことを示すに役立つのである。こゝで其の例を與へることは必要ではない。

私は或る程度、此の面について考察して來た。恐らくは最も單純なものであらうけれども、ピアソンの研究の中では少なからざる重要性を持つものである。何故ならば、アジアの種族について隨分澤山の資料を使用し得る場合、それを適當に理解しておくことは必要だからである。

生物測定學者は大部分は此の方法に興味を持つて來た。それ故彼等は此の方法を人類學的な問題に適用した。然し乍ら、最近或るアジア人種の研究に基礎をおいた一つの試みが「地域的人種近似係數」を構成することによつて、古い分析方法を凌駕するに至つた。此の係數は人種の結合的特徴に數多くの價値を與へんとするものである。多くの人

類學者に感じられて來たものは、單一の特徴又は指數、或ひは二、三の任意的に選定された規準、例へば身長、頭形指數等々だけでは人種差異を表はす充分な方法ではないと云ふことである。亦或る場合には、明らかな證據が極めて相反せるものであることが見出されてゐる。即ちA集團とB集團とは相互に相違してゐるが、或る二ツの規準の下では其の差異がなく、他の二ツの規準の場合は大である。その反對は、AとCの場合である。違つた方法に於いては相互に相違つてゐるBとCとの關係を決定することは容易な課題ではない。

提案された係數は凡ての特徴を結合させ、其れ等を單一な指數に換元することに依つて此の困難を打開してゐる。二ツの異なる人種に於ける同一特徴の平均値間の本質的な差異は、その蓋然的誤差を以て此の差を割ることに依つて評價されることが充分知られてゐる。この分割の商が三以上である場合に此の差は本質的なものと云はれてゐる。平均の蓋然的誤差は標準偏差を獲得すべき事例數の二ツの事象に依存してゐる。それはコンスタントで〇・六七四五である。人種近似係數はそのコンスタントな値の基礎にある事例數を以て、各々を割れる二ツの標準偏差の合計によつて割られた二種族の平均値間の差を割ることに依つて見出される。平均からの平均的偏差ではなくて、平均的平方差をとると同様な方法に於いて、その數は割られる前に平方されねばならない。勿論その様にして獲得された數値は、我々が選擇せる特徴の數を以て割られねばならない。さすれば我々は、實際平均的本質的差異に見積らるべきもの、或ひは寧ろ〇・六七四五を以て割られた平均的本質的差異の値を獲得するのである。數式的に云ふなら、本質的差異は次の如き場合に見出される。 M_1 は第一の人種の平均頭形指數、 M_2 は第二のものの平均頭形指數を表せば次の如きものとなる。

$$\frac{M_1 - M_2}{\sqrt{E_1^2 - E_2^2}} = \frac{M_1 - M_2}{\sqrt{\left(\frac{.6745 \cdot \sigma_1}{\sqrt{n_1}}\right)^2 - \left(\frac{.6745 \cdot \sigma_2}{\sqrt{n_2}}\right)^2}}$$

此の場合、人種近似係数は次の如き公式から得られる。

$$\frac{1}{K} \sum_{i=1}^K \frac{(M_1 - M_2)}{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}} - 1$$

Kは考察されてゐる特徴の數、Eは蓋然的誤差及びσは標準偏差である。本質的な差異を取り扱ふ場合、最初の人種と第二の人種が或る特徴に關してはヨリ大きく、他の特徴に關してはヨリ小さいかどうか直ちに氣付く場合、我々が平均間の差異を平方することによつてプラスとマイナスの記號の持つ困難を避けてゐると云ふことが知られるであらう。之が有利であるか不利であるかどうか、は此の方法が更に試された場合に知られるであらう。だが然しその記號から離れて差異を考察する事は有利なもの様に思はれる。勿論、平均値を獲得するが爲には、そのプラス、マイナスの差異を相殺する何等かの手段を持つことが必要とされるであらう。

違つた人種に對する同様な標準偏差の過程に對する反對は（其の過程についてはモラントが彼の論文に於いて論じた所である。）こゝで論ずる必要はない。

何等かの特徴が他のものよりも一層大なる比重を與へられると云ふ困難が提示されるかも知れない。だが標準偏差を用ひ、之によつて其の差違を表明する方法は技術的觀點から見て此の困難を氷解させるものである。だが其れは實際的なものからは其の困難を氷解しない。明らかに若し我々が緊密に關聯を有つてゐる特徴をとるならば、我々の測

定値には充分な比重を置いてはならないのである。三つの特徴は緊密な關聯を持ち、残りの七つは最少にしか關聯を持つてゐない十の特徴を執り上ると假定せよ。之等の事情の下に、平均的係數を獲るために十で割ることは充分ではないであらう。而も相關々係は完全ではないやうであるから、緊密に關聯を有せる三つの特徴を一つとして取扱ひ、一で割る事は誤りと思はれる。此の困難は實際、互ひに最少乍らの相關度を持つる特徴を選択することによつて氷解される。此の困難は常に考察さるべきものである。

更に一つの障害は我々の選擇せる測定が必然的に任意的な性格を持つてゐると云ふことであり、現在の知識狀態を以つては或るものが他のものよりも一層大なる人種的重要性を持つてゐるやうに思はれるのである。人種的と云ふことは環境よりも遺傳によつて一層影響を受くるものである。係數を形成するために選擇された特徴は任意的なものであり、其の結果の價値は其の選擇の行はれる熟練に依存してゐるのである。人類學者は現在、何が最良の特徴であるかに關して意見の一致を見て居らず、又現在我々の知識狀態では問題は純粹に實驗的な段階にあるものと考へられねばならない。

提起される更に一つの障害は我々が明白な測定値を純粹に任意的な數値に換元してゐると云ふことである。若し同様な測定値が總ての場合に選定されるならば、此の數値は大なる價値を持つものであるであらう。其の選定が各々の著者の論文に於いて異つてゐるならば係數値は、それによつて著しく價値を減ずることとなる。必要とされる計算の量は、一人の著者が限られた時間で比較的限られた分野以上のものに涉らんがために爲し得るものとは考へられないやうである。

然し乍ら科學的方法はその結果によつて判斷されねばならない。而して現在其の係數が實驗的な段階にあること、

明瞭である、然し乍ら、それを此所に詳細に考察することは、するに値することのやうに思はれる。何故ならば、それはアジアの種族の問題の解明に之迄用ひられて來たし、また比較的不明なためにそれが人種學者に充分理解されてゐないがためである。現在其の方法は南印度と黄色人との結合を除いて比較的簡單な方法によつて發明され得なかつたものを示してゐないけれども、その陳述は一般に公認される所とはなつてゐない。之については後の章で考察することとする。然し乍ら生物測定學者は充分、此の方法を發展することに成功したやうである。斯る方法は若しそれが工夫に工夫を重ね充分なる事が證明されるならば、斯學に最も大なる貢獻を與へるものと思はれる。

私は以下の章で此の方法を使用するために生物測定學派の業績をある程度述べて來た。この方法は一般の人種學教科書では大部分無視されてゐる。例へばキーン、ドニケ、リプリー等がさうである。現代の論文は一方では標準偏差等を用ひ乍ら、複雑な部分に入ると其れを無視する傾向があるのである。

之迄、生物測定學派の方法は一般的人類分類を公にせんと企圖しなかつたけれども、それはケトラー (Oettinger) によつて提案されたものと相似せる目標に向つて研究して來たやうに思はれる。

公にされた最も最近の分類はハットン (A. C. Haddon) の分類である。彼は三つの特徴即ち皮膚、毛髮及び鼻を適用した。「其の圖式は動物學者や植物學者等によつて理解されてゐる言葉としての分類ではなくて、地理的考察を含んでゐる分類である。人類を體系的に分類せんと試みた者は總て困難に遭遇し、屢々地理的集團に戻込みしてしまつたのである。」とハットンは云つてゐる。

ハットンは今體としては可成りの修正を加へてトビナールによつて提案された分類に従つた。彼は或る點では生物測定學派によつて主張された多くの見解とは異つた見解を抱いてゐる。彼の規準は一般に認められてゐたものと廣範

に異つた分類を提案するに至らしむる態のものではない。だが彼は何か異つた人種關係觀を持つてゐたやうに思はれる。

極めて異つた立場から該問題に接近した著者達も全體としては一見彼等が異つたものと見えても、根本的には一致した調査研究に見出される意見を保持してゐた。然し乍ら、其の分類は大部分は技巧的なものであり、結局意見の差違は或る種族が白色人種に屬するか、黄色人種に屬するのかに關して分れて來る事が知られるであらう。國境線にある事例は多々あるために、人種學者は未分化種族を認めなければならぬか、或は人種的混淆を提案しなければならぬ。數學的方法の信奉者は變化を極度に測定し、變化の存する所、人種的混淆がたゞ、次の如き場合に高度に行れると信じてゐる。即ち混淆が合成的となり、二つ以上のものが極度に混淆する様になる結果、最後の人種が純粹なる人種と隨分變つてゐるか、殆んど變つてゐないか何れかの場合が即ち之である。

だが主要な人種系統に限られる困難ばかりではない。主要な集團の細分類は殆んど數限りない數であり、際限なき論争に對する主題、廣範な數値、限りない測定、等は屢々不完全にしか理解されてゐない。一般に認められてゐる若干の基準があるが、研究家は互に意見の對立せる文獻に引きすり廻はされてゐると云ふ状態である。

基本的な問題は人種的不變性に關するものであるやうに思はれる。進化論が認められてゐない時代には此の問題はブルーメンバツへの如き人類學者によつて知られてゐた。其の理由は、人類の衰退は其の進展よりも一層強く燃焼された幻想であつたからである。

今日此の問題は廣範な立場に立つて論ぜられてゐる。一般的には此の問題は環境が遺傳的特徴を作り出すが如き方法で人類に影響を興へ得るかどうかの論議に限られてゐる。大抵の生物學者の意見は他の動物と同様に人類も胚原

形質⁽³⁾の媒介體であると云ふ見解を持つてゐるやうである。其の可死的肉體は將來の世代に受託され不死的にして貴重な物に對する刺戟の効果を遺傳する事が出来ないものと認められて來た。生存の松明の擔ひ手は山の高みに墮き、登り、彼の齎せる松明を消滅するかも知れないが、彼等は神聖なる火の性質を變改することが出来ないのである。

人種には一定の多様性があり、それは肥沃な雜種を作り出す事が出来るけれども、多少とも眞の系統を現はしてゐるやうに思はれる。其の差違の中の若干のものは恆常的であり、他のものは正確な觀察・測定を加へること困難である。之等の差違の起源は、進化論の受容以來可成りの論議の對象とされて來た。二つの觀點が表明された。全體として殆んど認められる所となつてゐない一派は人間の多様な起源を異れる猿又は其れと相似の祖先から主張する立場であつて、此の見解は人類の異つた集團の緊密なる相似性によつて支持され難きものとなつてゐる。第二の派は人間が環境の影響の爲に修正を受ける様になつたと云ふことを提案してゐる。更に此所で此の修正は二つの方法に於いて行はれる様に思はれる。人間の多様性は變種又は變異に基いてゐるのであり、生存してゐるものは其れが歸屬してゐる條件に最も良く適合してゐるものである。或ひは一定の環境的刺戟に應ずるために、種々の機關の暫時的集成に最も適合されたものである。ハットン⁽⁴⁾は嘗て人間が現在よりも分化されて居らず、それ故に一層環境の影響を受け得ることが可能だと提案してゐる。キース⁽⁵⁾(A. Keith)は此の進歩的な進化が作用することを決して止めず、文明が人種の一定成員の肉體型に一つの影響を持ちつゝあると云ふことを提案したのであつた。

異つた型の混淆を持つ効果は一定の人種型の可能な起源として指摘された。斯る提案は然し乍ら特殊型の持つ原基的困難を克服しては居らない。

變化の現實のメカニズムについては我々はこゝで觸れない。だが然し、證據は一定の人間型が一定の環境條件と關聯を持つことを暗示してゐる様に思はれる。然し人種には潜在力がある様に思はれ、之等の潜在力が認められる限りはその環境に應ずる充分な運動は可能であり、特殊化が行はれた後、進化の線は後方ではなく前方にとられる様に思はれる。即ち若し何等かの理由で一つの特別な型が廣鼻型として發展した様な場合には、狭い鼻を持つ型を發展させる刺戟は廣い鼻を發生させないであらう。

研究目的上、我々は一定の特徴を孤立化するけれども、現實の事實に於いて人間は複合的な有機體であり、その存在が色々なオルガンの個々別々な機能にではなく、寧ろ最も複雑な一聯のオルガンの相互浸透的な機能に依存してゐると記憶されねばならない。以下私は一定の特徴が(その或るものは屢々人種の重要性を持つものと考へられてゐる)どれ程環境に相應するものであるかについて簡略に示したいと思ふ。然し乍ら私が最初に述べたことは記憶されねばならない。全オルガンと環境との關係は實際最も重要な特徴である。だが然し此の關係を論ずることは此の書で企圖され得ないものよりは一層大なる複雑性を持つた研究となるであらう。トムソン教授(D. Arthur Thomson)は環境が人間構造の主要な特徴を形成するに際して一つの重要な役割を演ずると云ふことを提案したのであつた。彼の見解の大抵のものは所謂機械的考察に基いてゐるものである。例へば彼は頭が最も形態形成上重要な影響を受けると云ふことを強調してゐる。同時に彼は斯る機械的な影響が效果的に働く様になる時間の長さについては何らの意見も表明して居らず、又それ等がどれ程人種的な特徴、或ひは個々の特徴に影響を及ぼすかについても正確に述べて居らない。この研究の重要性は、我々が通常好適な人種徵標と考へてゐる特徴を詳細に考察するやうになる場合に知られるであらう。若し之等のものが集團としてか個人としてか兎も角、環境の直接的影響の結果たるべしと云ふことが證明され

得るならば、それ等が一定特徴を共通に持つ各種々族の親縁關係を示すには役立つものたることは明瞭となる。人種が何らかの意味を持つものとすれば、プロカによつて與へられてゐる意味とならねばならないと云ふことが明らかになつて以來、此の問題は特別の重要性を持つてゐる。即ち彼は云ふ。「人類の多様性は多少共同一の變動を持つ個々人の間の直接的關係の觀念を與へる所の諸々の人種名を求めてゐる。だが然し確定的にも否定的にも、異つた多様性を持つ個々人の間の關係の問題を決定しては居らないのである。

我々が人間構造に與へる環境の影響の問題に直面する場合、我々は既に述べた相關々係論、偶然論を特に使用せねばならぬ事になる。それは我々をして人間の肉體に於ける一定特徴が他の特徴又は外的影響と關聯して變動する範圍を極めて正確な方法で吟味せしむるのである。それらは常には用ひられ得ないけれども、用ひられ得る場合にそれを使ふことは最も重要性を持つ。

過去に於て最も一般に認められた人種規準は頭形指數であつた。トムソン⁽¹⁵⁾は頭蓋形態を決定する要因が若干存することを示した。最も重要なものは頭のサイズである。全體として頭の大きさと身體の大きさの間に一つの相關關係があることは殆んど疑ひ得ないが現在我々は頭の大きさがどれだけ異なる人種と相關々係をもつてゐるかについては知らない。この點で人種差異の一つの重要な標識を見出すことは可能であらう。

第二に鼻の根元から大肺孔の前限の中央に至つて測定された頭蓋基底の大きさは大なる重要性を持つ。形態學的に背柱の一部の長さを形成してゐるこの長さはその長さと相關々係を持つてゐる。背柱の長さは可成り變動的であるが、その合成的な部分は常に同様な比率を保持してゐるやうに思はれる。若し小さな頭が長い基底の上に存するならば頭蓋は長頭となり、頭の大きさが増し、その基底の長さが減退するにつれて短頭型となる。

トムソンは又、顛筋が長頭人種には相對的に長く、頭の大きさと顛筋の長さの間には決定的な相關々係があると云ふことを示した。例へば圓頭型人種に於いては咬筋は一層發達してゐる傾向があり、顎は狭く、長い顎を持つ長頭型のものよりは一層廣く一層短い。ケース⁽¹⁾は之等の理論に反對意見を表明した。即ち、咀嚼筋肉及び首の筋肉は十二歳から二十八歳の間は大なる發達をとげる。その時以前に頭蓋骨は殆んど完全に成人の大きさと形に達するのである。生存者の測定から得られた證據は頭蓋形態に於ける變動が唯その外形にのみ影響し、頭蓋腔の形状には影響を與へないものなることを示してゐる。以上の立場に立つてケースは反對意見を表明したのであつた。

頭蓋形態と筋肉發達との關係が現在の所では何等證明されて居らず、多くの理論的困難があると云ふことを認めると同時に、現實の相關々係を提案するに充分な證據がある様に思はれる。その緊密な關係の問題は現在疑問に附されてゐる。

頭蓋形態を決定する現實の要因の關係に於いて疑問がどこにあるにまれ、今日までそれが色々な人類型を分類するに最も便利な方法を構成してゐると云ふことは疑ひ得ない。先づ第一に頭形指數に關する豊富な資料が、之まで多くの觀察者に依つて他の特徴に關するものよりは一層多く蒐集されて來た。我々が大きな地域を取り扱ふ場合此のことはそれ自身有利である。第二に屢々用ひられてゐる總ての指數の中、頭形指數は最も變動の少いものである。だから其の平均は人種の眞の平均を表示するのに最も好適なものである。第三に人種間の狭い變動にも關らず、一般に人類の中にあつて各集團の平均的頭形指數は約二〇パーセントの變動を持つて居り、觀察者をして集團構成を可能ならしむるに充分な廣さの變動である。他方一定の觀點から見れば頭形指數は不充分的な指標である。何故ならば指數が同じでも決して人種的な親縁關係の存在を意味してゐるのではなく、亦明らかに關係を持つた人種でも極めて廣く異つ

た指數を示してゐるからである。廣頭のドイツ人と長頭のスカンデナビヤ人とは同一の人類分類に屬してゐる様に見えるが、彼等は廣く異つた頭蓋形態を持つてゐる。ドニケの人類學の末尾に與へられた表に従へば、ニューブリテン群島の土人、マイゾールのカナリーズ、カサイのバシランゲ族、グリーンランドのエスキモー族、南アメリカから來たポトクド族及びバレンシアのスペイン人など、總て之等は僅かに〇・一パーセントの差を持つ頭形指數を示してゐる。だが之等のものが、如何なる意味に於いても相互に緊密な關聯を持つた種族であると云ふことは出来ない。ライヘルは支那人の頭蓋形態がデイゼンテイス型から分化して居らないが、顔面測定は二つのものを顯著に區別するのに役立つと云ふことを示したのである。

其の價値とそれが受けた一般的好評にも拘らず、頭形指數が絶對に信頼し得べき指標ではないことは明らかである。一定の事情の下に於いてそれが個々の筋肉發達によつて、亦環境に敏感な他の特徴によつて影響を受けることは可能である。極めて異つた人種系統に屬する人が同一の頭形指數を持つかも知れない。

更に重要な事は異なる人種集團が同一の平均頭形指數を持つてゐるかも知れないことである。逆に云ふなら頭形指數に於ける差は必ずしも人種の差異を意味するものではないと云ふことである。之に對して我々はただ頭形指數の便宜性を選択する。それは屢々疑ひもなく好適な人種規準たる役割を果すし、亦それは最も變動少なき測定値だからである。

鼻形指數が或る著者達によつて好適な人種微標であることは既に述べた。多くの理由から相互に關係を持つてゐない人種でも同一の指數を持つてゐることがある。トムソン教授と共に私はこの問題を他の場所で既に論じた。(8) トムソンは特に二つのアメリカ人に關して鼻形指數が一定の氣候條件と關聯をもつこと、高指數は湿度の高い暑い氣候の

中に見出され、低指數は寒冷な氣候の中に見出されることが示され得ると云ふことを提案した。後の論文に於いて世界全體から證據が齎され、氣温が最も重要な影響を與へ比湿度と云ふものは比較的低い影響力しか持つてゐないといふことが示された。然し乍ら多くの國民を吟味してみると、勿論多くの例外は起るけれども、住民の居住せる地方の氣温及び比湿度の知識から鼻形指數を規定することが相當種族に對して正確に可能であることが判明した。北極圏に居住せる Eskimo 族は最も狭い鼻を持ち、廣い鼻を持つたものは熱帶地域に擴がつてゐるのである。Tomson はこの分布は肺臟に入る前の空氣が肺臟のデリケートな組織を害しないやうにあたゝめられ、湿度を加へられねばならぬと云ふ必要から結果したものだと思案した。熱帶森林にある條件に於いては空氣は暖いと共に濕つてゐる。だからその肺臟に吸入されるのである。

鼻形指數と氣候條件との間の相關々係は極めて高いので、何等かの説明が必然的にその現象に對して加へられねばならない。その例外となるものは恐らくは特殊化作用に基くか、或ひは調査されてゐる種族が、その現に住居してゐる條件に屬してゐない事實に基くものと思はれる。之は恐らくはオーストラリア人及びタスマニア人に見出されるであらうが、彼等は環境が與ふべしと思はれるよりも一層廣い鼻を持つてゐる。

だが然し現在我々は環境が人間の肉體に作用するにはどれ位の時間が必要とされるかと云ふことについては知らない。だが問題が一層充分に理解される場合、我々は鼻形指數の中に種族變動の價値ある道すじを見出すこととなるであらう。殊に我々が一定の種族がその現在の環境に應じて變動せる指數を持つと云ふことが發見される場合はさうである。鼻形指數が我々に原基的證據を與へると云ふことは妥當ではなさそうである。

身長は或る著者によつて好適な人種徵標と考へられてきた。それはリプリーのによつて極めて適切に論ぜられた。

彼は次の如く要約してゐる。「身長は寧ろ人種の問題に於いて一つの不確定的證據物件である。だが肉體的特質は主として環境からの攪亂的影響を受け易い」と。身長は一つの影響を與へるものと思はれる。環境的特徴は、氣候、場所、食物、集團に關係を持つ健康状態、社會淘汰の影響などの如きものに分類されるであらう。

氣候の直接的影響の効果は現在の所不確定である。最も身長の高いあるものは最も反対な氣候條件の下に生活してゐる。北西ヨーロッパは身長の高い集團が存在する。リブレは之を北方人と呼んだ。上ナイルのまはりの沼澤地帯に住んでゐるナイロテイクニグロ族も亦、大なる身長を持つてゐる。北支那人はその近隣族及びその親縁族よりも明らかに身長が高い。南アメリカのパタゴニヤ人はその身長で有名なものとなつた。他方、倭小人種は大部分は熱帯地方に住居せるものである。彼等はこゝで他の身長の高い人種と兩々相ならんで生存してゐるが、彼等の身長を純粹に氣候的な條件とかけづらはせることは困難なやうに思はれる。一般的な規準として極端な條件は寧ろ低身長と關係を持つ様に思はれるが、之が食糧供給に間接的に影響を及ぼすことによる以外の氣候の影響であると提案する理由は現在のところ何もない。而も彼等は同一地域内で他の長身型種族と一緒に住居してゐる。こうなると、種族の身長と純粹に風土的條件を相關させると云ふことは困難であるやうに思はれる。

居住は直接、間接の影響を持つてゐるやうに思はれる。間接的影響は異なる條件下に住居せる集團が獲得しうる食料のあれこれ異なる供給に依據して居り、之は人種住居地の風土と位置とに關係を持つてゐる。山嶽地帯の人種の身長は低地の其れより低いと云ふ事が叫ばれ、此所で再び其の論證が圖はされることになる。其所で之に對しては次の如く解釋するとよい。一般に山嶽地は平地よりは寒冷であり、食物の供給は不充足である。其所で右の様な現象が起るのではないかと思ふ。之に付いての詳細はアジアの高地人種を觀察するときに委ねよう。

食物が身長に對して重要な効果を持つことは殆んど疑ひのない所である。一般的に云ふなら、食物の供給が不充分である様な種族は他のものより身長が低い。だが熱帯地域の倭小種族が此の種の種族的貧困の結果であると云ふ様に判断することは不可能ではない。熱帯地方は生活するに不快適なる地方であり、従つて食物によるカバトが充分達せられないと云ふ事情を持つてゐるのである。此の様な食物供給の僅少さの身長へ與へる影響が、どれ位の時の経過によつて現れるかと云ふことは不確定であるが、恐らく、その影響は種族的なものよりは個人的なものに基くものであらうと考へられる。ヴィタミンの持つ人類學的的重要性如何は未だ充分に論證されてゐないけれども、未開人の食物の或るものには斯る必要營養を排除してゐるのであることを思へば、何等かの影響はあるであらう。他方に於て或る低身長（例へばセイロン島のヴェツダ族）の原始種族の食事は充分釣合のとれた營養價を持つてゐると云ふことを私は知つた。

コリニオン及び彼の後にリブレは所謂悲惨な地點の存在に注意を拂つた。そこでは恵まれた状態にある近隣のものよりは一層顯著に悲惨な地點が存在すると考へてゐる。南支那の福建省に旅行した時に、私は或る村人が低身長であつたことをはつきり記憶してゐる。彼等は全體として不十分な食事をとつて生活してゐる様に思はれる。ヨーロッパの證據が示す所では悲惨な地點から平野に種族が移動する場合に、子供の身長は正常的な身長をとりもどすといふ事を示してゐる。之が支那にあるかどうかの證據については遺憾ながら存在しないが、支那にはあるものと考へられようである。かゝる事情の下に悲惨な地點は人種ではなく、かゝる不幸な條件にたゞ屬する成因に影響を及ぼす所の非人種現象として考へられるであらう。我々は現在、所謂個人的な條件と人種的な條件とを區別する事が出来ない。何故ならば我々は長期間に渉る資料を殆んど有してゐないからである。

社會全體の一般的健康状態が一種族の身長に影響を與へると云ふことは充分理由のあることである。マラリアの様な疾病が平均的身長を退化させるものなることが示された。斯る劣弱なる生命力は種族的なものよりは個々のものとして考察さるべきであるやうに思はれる。

淘汰は疑ひもなく身長の發達に一つの大きな役割を演ずるであらう。ピアソンが示した如く身長の高い個々の後裔は人種的な平均に近づく傾向があるけれども、多くの複雑な要因がそこには働いてゐる。アジアを取り扱ふに際して我々はヨーロッパのそれとは異つた問題に直面するのである。何故ならば住民の大多數の間に子供に對する願望が極めて強く、それ故生産に好都合な大なる偏見が存在するからである。不妊の結婚者は社會的原因ではなくて肉體的無能の結果であり、婦人の不妊はヨーロッパに於けると同様には作用しないのである。それ故、活力ある系統のものはあらゆる生存機會を持ち、屢々身長は活力ある系統と相關的な關係を持つてゐる様に思はれる。淘汰がアジアの住民に影響を及ぼす他の道は、現在の所證明するのに一層困難である。この大陸のある部分は數百萬のものを破壊した大激變に見舞れた。通常最初の激變は強きものと弱きものとを破壊する。然し乍ら、屢々平均以上の身長を持つ最も強きものが此の危機によつて、生存することになる譯である。生命の大なる損失は地域に住む人口を稀薄ならしめ、人種の身長は他の事情にして等しいとすれば、微小ながら増大する傾向をもつのである。

私は身長に直接間接影響を與へる環境の五つの場合之等の影響が個々のものに限られるか、或ひは人種的なものにまで及ぶのであるかについては全く不確實である。然し乍ら人類學的結論の基礎となつてゐる資料は個人から集められてゐる。特徴的な身長が個人の歸屬してゐる種族の特徴であるか、或ひは觀察されてゐる村又は町が何らかの特徴的な制限を身長に課するのかどうかについて一般的に評價することは殆んど出来ないの

である。異つた種族は異つた影響を受けてゐる。従つて一定の事情の下に於いて、我々は異つた条件からの特徴の複合體を確得するのである。或ひは更に同様な條件ではあるが、異つた人種的潜在力は異つた結果を作り出すかも知れない。それ故、我々は之等の困難を記憶し、環境の直接的影響を決定的にあつづける場合に、それを抽出して身長をあるがまゝに取り上げねばならないであらう。

私が之まで考察してきた特徴は決定的な測定を受け入れてゐるのであり、それ故異つた個人は互ひに微小に異つてゐる結果を現はしてゐるものかも知れないが、全體としてその差違は大したものではないであらう。だが然し觀察の容易でない多數の特徴が残つてゐる。これ等は量としてよりも質として考へられるであらう。斯る特徴の中には毛髮、眼及び皮膚の色、毛髮形態等が含まれる。楮、一人の男が頭形指數八二を持つとする。だが我々がその男の眼は青いと記述する場合、直ちに我々が誤つた概念の前に立たされてゐる事は明瞭である。何故ならば青いといつてもそれには種々のものがあるからである。觀察者が色のついたガラス、レザー、又は毛髮を規定しても、彼は依然として極めて重大な誤謬をおかしてゐるやうである。何故ならばそれらが同一の度合にある場合にすら、それらの陰影をまぜ合す事は明らかに困難な問題だからである。だが毛髮の色の差はヨーロッパ程アジアには重要なものでない。何故ならアジア大陸に於いて毛髮は殆んど大部分の住民に於いて黒であり、眼は通常褐色であるからである。毛髮組織も様々な變化を現はしてゐるが、大部分は直毛であるからその例外となるものが注目されねばならない。皮膚の色は、アジアの種族を取り扱ふの際に際して大なる問題を構成してゐる。それは殆んど完全な黒色から白色に至る變度を示してゐる。皮膚の色は同一の人種でも個人を異にすると變つて居り、又、同一の個人でも身體の部分を変つてゐる。我々が量を取り扱ふ場合、この困難は集團の量の平均値を作成することによつて便利に克服することが出来る。

質に關しては之は一層困難である。之まで若干の提案がなされて來たけれども未だかつて充分な方法が提示されたこととはない。之は依然として遺憾な問題である。何故ならば疑ひもなく皮膚の色はアジアの若干の種族を區別するに便利な方法となつてゐるからである。

我々が以前に述べたやうに、之等の特徴が環境によつて影響を受けると云ふ事は殆んど疑ひない事である。明らかに全體として黒色は熱帶的氣候と關聯を持つてゐる事である。他方では決して黒くない住民が熱帶に存在する。然も、熱帶から移住し、熱帶よりも一層好適な氣候の中に生活を營んでゐる北アメリカのニグロ族は、依然としてその近隣の明色のものとは異つた黒色を呈してゐるのである。此所で再び鼻形指數の場合に於けると同様に、一特徴は氣候條件と關係を持つてゐる様であるが、之等の特徴はその條件が變動した時ですら一貫して残ると云ふ事が知られる。

眼の色は皮膚の色と相關々係を持つてゐる様に思はれる。だが問題は此の場合一層困難である。何故ならば皮膚及び眼の色の異つた陰を認識する事は比較的容易であるけれども、一度び比較的制限された青と淡褐色の眼が選び出されるや、すべて褐色のものとして分類されるからである。それ故この點で決定的な結論を與へるに足る資料は現在殆んどないと云つてよい。

毛髪の色もまた困難な問題である。アジアに支配的な色は黒であるが、一見環境的條件はこの色と殆んど關係を持つてゐない様に思はれる。他方ヨーロッパに於いて、明るい色の毛髪は少くも西海岸に沿ひ南方に進むにつれて減退してゐる。

然し乍ら毛髪の組織はアジアでは可成り異つてゐる。形態に於いても組織に於いてもアジアの大部分の住民とは毛髪を異にしてゐる羊毛質のネグリート族はさて置き、直毛の人種は極めて差異を呈してゐる。殊に個々の毛髪が試さ

れた場合には其の現象が見られる。例へばアイヌ族はその近隣族たる支那人、日本人とは非常に異つた毛髪を持つてゐる。

我々の前に横たはる之等の困難にも拘はらず、我々はアジアの異つた種族を區別するに好適な若干の規準を選び出さねばならない。リプレーがヨーロッパに對して適用した如き單純な分類を適用し得ない事は明らかである。

第一に彼等が取り扱つた程の資料を我々は現在持つてゐない。第二に疑ひもなく頭形指數が様々な人種を區別するに價値を持つてゐようとも、その重要性は一般的なものよりは寧ろ地方的なものである事が知られるであらう。我々はそれを一種族と、その近隣種族を區別するのに使用し得るが、この特徴のみによつてはアジア民族の中に於ける或る種族を系統的に位置づけ得ないのである。だが然し頭形指數に關する資料は、恐らく他の特徴に關するものよりは一層豊富であるから一つの重要な役割を演ずるに相違ない。

次に毛髪と眼の色はヨーロッパ種族に於ける程の價値を我々の研究目的に持たぬやうである。と云ふのは、アジア種族の毛髪は殆んど總てが黒色であり、眼は褐色であるからである。尤も例外もあるから、其の様な場合には特別の價値を持つ譯である。そこで、毛髪の色彩よりは其の形態、性質が最も爲になる分類の基礎である。

ブロンドと皮膚の色は、(ブロンドとブルーネットと云ふ彼の言葉が元來皮膚の色と共に毛髪及び眼の色を含ませるために用ひられたものに相違ないが)リプレーによつては殆んど考察されなかつた。アジアに於いては既に見た如く皮膚の色が環境に影響される特徴であると云ふ事實にもかゝらず、我々はその中に歴々廣範な人種集團を識別するに役立つ導きを見出すのである。たとへ、その不明確な程度のために一層地方的な問題を取り扱ふのに際して失敗に陥つてすらさうである。

身長は不確定なものであると云ふ事は既に述べた。だが其の規準としての不確定性にも拘らず、両親の身長と、子供の身長との間には極めて密接な関係があることは記憶して置かねばならない。アジア民族を分析するに際してもこの明瞭な関係を考慮に入れて置くことと自ら開ける分野も出て来るであらう。

鼻形指数が特に民族の住居せる地域の風土的條件と密接なる關係を持つてゐることに付いては既に述べた。だが子供の鼻形指数が其の両親と密接なる關係を持つてゐることは殆んど疑ひのない所である。尤もこの點に關する有用な資料は數少い。とまれ、我々が同一環境内の異種族を取り上る場合には、鼻形指数は、時には、其の起源に對する導きともなり、暗示となる事がある。

アジアに於いては顔の廣さの點で人種を區別するのに貴重な資料となるものが發見される。このアジアの種族のあるものに特徴となつてゐる特に扁平な顔を適當に示すべき何らかの方法が工夫されうならば、顔は一つの人種特徴となるであらう。だが現在、かゝる方法は何等一般に使用されてゐないし、通常の測定もかゝる顯著な特徴を示すに全く失敗してゐる。

之迄、私は靜態面として記述されうるものから、環境が人間構造に與へる影響を考察して來た、だが、斯る方は明瞭に不利益である。何故なら人種は決して靜態的なものとしては考へられないからである。全大陸に涉つて人種移動が行はれた。然も文化的移動の影響をあとづける事は可能であるけれども、肉體的移動が行はれた正確な経路を跡付ける事は、不可能ではないにしても一層困難である。我々は今日アジアに於いて環境の影響を研究する場合、我々の研究してゐる種族が現在の習性をその特徴形成に要する充分な時間に涉つて行使してゐるといふ假定に立つてゐるわけである。

環境と、人種的なものとして認められてゐる特徴との間に、何等の相關々係がないとするならば、人種移動が興へられた地域の住民に影響を興へるものと考へられる。支那には特に北方から敷限らない侵入があつた。だが之等の侵入は支那の住民を何等變改しなかつた。といふのは侵入者は支那の住民に吸収されてしまつたからである。我々は之が事實であるかどうかは知らない。眞實だとするならば二つの可能性が残る。侵入者は餘りにも敷に於いて少なかつた。だから生物學的に彼等の侵入した地域の住民に影響を興へるには不十分な強さを持つにすぎなかつたか、或ひは彼等の發見した新しい環境に應じて彼等自身を變更させたものと思はれる。我々がアジア史を跡付け得て以來、アジアの部分は深く變容を受けた様に思はれ、他の部分は現在の住民と殆んど異つて居らないやうに思はれる。サイプラスの歴史は侵入に次ぐ侵入の歴史であつた。西から東から來た首長がこの島を支配した。それ故、様々な時期に顯着な文化的差違が存する。他方に於いて北岸に於ける青銅器時代の一寒村の住民は(ラピトス)今日の住民とは殆んど變つてゐない住民が生存してゐた。全島に涉つて獲得された種族の頭蓋骨を選擇してみると、異なる時期にあつても大なる差違を表はして居らないのである。他方に於いて、アルメノイドと地中海人の血の割合は、或る村では微少ながら場所的差違が表はれてゐる様に思はれる。二つの種族は四千年以上もの間、恆常的なものとして残つた譯である。古代の村に若干の差異があつたかどうかは現在手にし得る資料からは決定し得ない。だが然し本質的な變動はなかつたものゝやうに思はれる。この問題の正確な説明は更に探求されねばならない。

多くの人種がアジアで會合し混淆した事を我々は知つてゐる。二つの系統はアルメノイド人種と褐色人種とであつて、之等二つは極めて初期の時代に存在した。彼等は明らかに兩々相併んで存在してゐたのである。だがその當時、長頭型がメソポタミヤ地域の大部分に涉つて存在してゐたやうであるが、環境的效果は何ら現住民を驅逐し得なかつ

たわけである。

そこで、環境が人種形成に一つの重要な要因となり、多小とも大抵の住民の主要形態が此の決定に都合よく説明される事を暗示する強力な議論が表明され得る。だが、我々は人種移動が現住民との混淆によつて一定地方の住民を變化させるに充分な力を持つてゐたかどうかを知らない。他のものと殆んど混淆しなかつた種族が最も少い變異を示してゐる事はあり得べき事と思はれる。それ故、我々はそれらのものが多少とも、この環境と完全な均衡状態にあると説いてよろしからうか。或ひは我々は環境は考察の範圍外におかれねばならぬと考へるべきか。環境の影響に都合の良い議論は無視されるには餘りに強力なものであるが、他方で移動は類縁的な系統を屢々導入したやうに思はれ、それは異つた地域から來入して新しい環境と調和しなかつたものと思はれる。若し環境が有力な要因であるならば、新しい系統のものは變動するか死滅しなければならぬ。時としては消滅し、時としては消滅しない。此の問題を適當なペースペクティブを興へてなめるには、我々は餘りにも短期間の人種史を取り扱かつてゐるに過ぎない。だが我々が一層數多い化石を確得する場合には一步ふみ込んでこの困難に接近する事が可能であらう。

第一章 關係文獻

- (1) Keane, A. H. *Ethnology*. Camb. 1896.
- (2) Linnaeus, C. Ed. *decima reformata Holmiae*, 1758. Reprint, Leipzig, 1894.
- (3) Blumenbach, J. F. *De generis humani varietate nativa*. Gott., 1775.
- (4) Duckworth, W. L. H. *Anthropology and Morphology*. Camb. 1904.
- (5) Huxley, T. H. *Journ. Ethnology Soc. London*, 1870, N. S., II, 404.

- (6) Topinard, Paul. *Elements d'Anthropologie générale*. Paris. 1885
- (7) Sergi, G. *Specie e varietà Umane*. Turin, 1900.
- (8) Ripley, W. Z. *Races of Europe*. London, 1889
- (9) Deniker, J. *The Races of Man*. London, 1900
- (10) Pearson, K. *The Grammar of Science*. Lond., 1911.
- (11) Pearson, K. (Editor). *Tables for Biometricians*. Camb. 1923
- (12) Yule, G. Udney. *An Introduction to the Study of Statistics*. Lond. 1911.
- (13) Buxton, L. H. D. *the Anthropology of Cyprus*. J. R. A. I. 1920, I. 194
- (14) Morant, G. M. *In Biometrika*. Camb., 1924, XVIII. 1.
- (15) Thomson, A. (*Man's Cranial Form*) J. A. I., 1903. XXXIII. 135.
- (16) Keith, A. *Human Embryology and Morphology*. Third Ed. Lond., 1913
- (17) Keith, A. *Huxley Lecture, Nature*, 1923, CXII. 257.
- (18) Thomson, A., and Buxton, L. H. D. *Man's Nasal Index in relation to certain climatic conditions*. J. R. A. I. 1923, LIII. 92.
- (19) Haddon, A. C. *The Races of Man*. Camb., 1924.
- (20) Quételet, A. *Lettres..... sur la théorie des probabilités*. Brussels, 1843. (Eng. Trans. O. G. Downes, Lond. 1843.)
- (21) Retzius, A. *Ethnologische Schriften*. Stockholm. 1864.
- (22) Giuffrida-Ruggeri, V. *Homo Sapiens*. Bologna, 1913.
- (23) Giuffrida-Ruggeri, V. *U' origine dell' Uomo*. Bologna. 1921

- (24) Biasutti, R. Studi sulla distribuzione dei caratteri e dei tipi antropologici. Mem. Geogr., Firenze, 1912, VI.
- (25) Dixon, R. B. The Racial History of Man. New York, 1923.
- (26) Keane, A. H. Man Past and Present. Camb. 1920.
- (27) Martin, R. Lehbuch der Anthropologie. (Extensive bibliography.) Jens, 1914.
- (28) Flower, Sir W. H. Cat. Roy. Coll. Surgeons. Lond., 1879, I. (Man).
- (29) Quatrefages, J. de, The Human Species. Lond., 1879.
- (30) Quatrefages, J. de, and Hamy, E. T. Crania Ethnica. Paris.
- (31) Turner Sir W. Sci. Results of "Challenger" Exped. 1884, XXIV. 10.
- (32) Brooks, C. E. P. The Evolution of Climate. Lond., 1922.
- (33) Lyde, L. W. Climatic Control of Skin Colour (Papers on Interracial Problems, ed. G. Spiller, 1911, 104.)
- (34) Gimble, A. (Effect of Indoor Life on Pigmentation.) J. R. A. I. 1921 II. 42.
- (35) Huntington, E., and Visher, S. S. Climatic Changes, their Nature and Causes, 1923.
- (36) Mathew, R. Climate and Evolution. Ann. New York Acad. Sci., 1915, XXIV.
- (37) Conklin, E. G. The Direction of Human Evolution. Oxford, 1921.
- (38) Pearl, R. Modes of Research in Genetics. New York, 1915.
- (39) Carr-Saunders, A. M. The Population Problem. Oxford, 1922.
- (40) Keith, A. The Antiquity of Man. New Ed. Lond. 1925.

第二章 アジアの諸種族

第一節 人種地理

先きの章で私は種々の人種、人種間に存する關係、並にそれ等人間の居住する環境を考察して來た。私は一般的方法で環境的條件並に其れと人類との關係を叙述して來たのであるが、現在先づ第一にアジアに於る現實の環境條件を、第二にこの大陸に住居せる人種を概略論議する事が必要であるし亦、いやしくもこの二つのものが文化的な特徴に對してよりも、特に體質的特徴に對してどれだけの關係を持つものであるかを見る事が必要である。

人種學的には、アジアはヨーロッパとは分離して考へられ得ない事は、リプレのヨーロッパ人種研究によつて明瞭にされた所である。アジアの北部と地中海沿岸を除く全ヨーロッパとは一つの生物的領域を形成して居り、或る人類學者の意見に依れば單一の人類學的領域を形成してゐるのである。ウラル山脈は大抵の地圖の上で一つの顯著な特徴を形成してゐるのであるが、民族移動を妨害してゐるものではなく、南方では全く障害がないと云つて良い。現實の人種學的境界は東西に走つて居り、其れ故にだ、大陸間の人種を分割する事にのみ役立つて居り、其の大部分は大歐亞大陸の人種的統一を明瞭ならしめてゐるのである。

所でアジアばかりがヨーロッパと緊密な連環を有してゐるのではない。其の他の大陸も密接な連環を有つてゐる。アフリカ大陸は殆んどヨーロッパの外圍地と云へるし。アメリカは極く僅かな一點で結び付いてゐるに過ぎないが、人種學的にはアジアと緊密に結び付いてゐる。アリヌーシヤン群島は一つの橋梁、或は寧ろ一列の踏石を形成してゐる。

るが、それ等は世界で最も荒れ狂ふ海に満たされた大きな溝を含んでゐる。ベーリング海峡を越える溝はアメリカと最も緊密な連環を構成して居り、特に氷の存在に依つて此の連環は比較的容易なものとなつてゐる。人類は殆どたしかに此のルートに依つてアジアからアメリカに達したものであらう。そして或る人類學者によれば、反對に此のルートによつてアメリカからアジアに人種移動があつたと主張されてゐる。だが此の連環は可成りの論争を巻き起したものであつて、我々の現在の研究目的上、人類が少くとも一度或は數度はこのベーリング海峡を渡つたと述べる以上、再説する必要はなからう。

太平洋諸島は大部分アジア大陸の東及び南東に存在する。之等群島の地表の面積は極めて微少なものであるが、廣く散在し、而も其の島と島との間のギャップは大きくない。

アメリカ沿岸に最も近い島はイースター島であるが（私はこゝで勿論大洋諸島について述べてゐるのであつて、アメリカ大陸と有機的連環を持つ島について述べてゐるのではない）それ等の島はバルパライソから海上一千哩の距離の所にある。ヨーロッパは先づ第一に太平洋については其の東部海岸から認識を始めたのであつて、島々はアメリカよりは寧ろアジアに一層緊密な連環を持つてゐたのであつた。

一般に群島は南東アジアの大群島から廣まつてゐる扇状のものとして記述されるかも知れない。太平洋の大抵の住民が遠い住居地を目指して出發したのはこれ等の大嶼島を傳ふルートに依つてであり、その或るものは人類が最初にそこに生活した時代には、恐らく本土の一部を形成してゐたであらう。

スミス教授 (Elliot Smith) は太平洋の島嶼は現實に一つの橋梁を構成して居り、此の橋梁を傳はつて文化がアメリカに導入されたと考へてゐる。彼の結論は多くの人類學者によつては認められなかつたけれども、最近一定量のア

ジア種族の血が太平洋と云ふ大きな廣がりを経てアメリカに流れて來た事は疑ふ事が出來ないのである。尤もこれがどれだけの住民に影響を與へたかと云ふ事は、未だ一つの研究さるべき餘地を残してゐる。

太平洋は恐らく長期間世界の爾全の地均と分離されてゐたものであらうが、人間と犬などの伴侶はオーストラリヤと云ふ最大の島の中に初期の時代に生活を營んで居り、又此の島に屬する近隣の地域に生活を營んで居つたのである。アジアがオーストラリヤの住民に影響を及ぼした事について一つの役割を演じたと云ふ事は想像される所である。この事は時代的に極めて初期の事に屬するので、オーストラリヤ及びタスマニア及び其の他若干の島々は殆んど慥かにこの母國であつた所のものに關らしめずに取り扱はれ得るのである。他方アジアとポリネシヤの遠隔群島との關聯は最近のものであり實際的に歴史的なものである。

ハックスレー(T. H. Huxley)以來の人類學者は、アジア大陸にオーストラリア原住民と緊密な關係を持つた住民の生存してゐる事を信じてゐる。其れは、オーストラリア原住民こそは嘗つてアジア人口に於ける重要な要素を形成した住民の中、最後に生き残つてゐる子孫だと云ふ學說を支持する人々によつて暗示された所のものである。尤も後になつて彼等は戦闘生活に一層備へた人種によつて壓倒された。

アフリカ大陸は、人種學的見地から見て、殆んどアジア大陸に外圍する地域と見て宜しいだらう。アフリカ自身がアジアに對する影響よりは寧ろ其の逆の事情があつた。此のアジアとアフリカをつなぐルートは三つある。第一の、而も最も重要なものは、地中海沿岸及地中海其れ自身である。

初期の時代に人類が地中海沿岸に現實に住居して居り、ヨーロッパとアフリカとの間の陸橋が依然として存在してゐる事が證明され得るならば（ザミット博士がマルタでなした研究は此の事が眞實であつた事を暗示してゐる。）アジ

アとアフリカとの溝は當時何等存在しなかつた事になる。アジアは東部地中海を支配し、スエズ運河が切開かれてゐる狭地は今日北アフリカに住む多くの人種が大陸に達すべき一つの媒介地を構成してゐる。

二大陸間の第二の連環はバベルマンデブ海峡に見出されてゐる。種族がこの路をどれだけ經由したかと云ふ事については疑問がある。現在アジア側の背後地は人種移動に好適なものではない。だが、人類が此の地域に住居して以來風土が厳しさを少くしたといふ事は、充分可能であらう。

印度洋が二大陸を結び付ける媒介となつてゐたとする事は何か逆説的な様に思はれる。アフリカ本土が人種學的に此の海を通つて來た種族によつてどれだけ影響を受けたものであるかは明瞭ではない。だが然し、現在現住民たるニグロはさて置いて、マタガスカルの大部分の住民は人種學的にはアフリカによりもアジアに屬してゐる。

偕、アジアは其の地理的位置から判断して見ると、以上の考察によつて他の大陸の住民に一つの重要な役割を演じてゐる。實際アジアは人類散布の原基的中心地を形成してゐるのである。其の沿岸は相對的にはヨーロッパのそれ程外延的ではないけれども、東部沿岸は大西洋と異つて人類の住居可能な多くの島々を含む大洋に臨んでゐる。アジア大陸の南部を洗ふ印度洋は上述の例外として、人類傳播に重要な役割を演じて居らない、人種學的見地から見た地中海史に對する重要性が強調されることは殆んどないのであるが、西部アジアの住民をして西方に移動せしめる役割を演じて來たことは否めない所であらう。尤もヨーロッパ住民の分布に役立つ程、アジア住民の分布に役立つはしなかつたのであるが、とも角、地中海の重要性は記憶されねばならない。

北極洋はアジア大陸の北岸を洗つてゐるが何等の交通媒介體を興へてゐないので、少くも我々の現在の目的には省略してもよろしいであらう。

後の章に於て私は詳細に涉りアジアの夫々の地域の特徴及其れと人類との關係を記述するであらう。此處ではアジア大陸の全體的關聯の下に此れ等の特徴を概観する事が重要である。アジア大陸は一連の山嶽地帯によつて分割されパミールを中心として、高原地帯を形成する高みが打續いてゐる。其等は或はイランの大沙漠へ、アルメニヤやアナトリアの山脈につらなつてゐる。東部には人類史に深刻な影響を與へた地帯があり、之は太平洋に達してゐるのみならず、洋上の群島として存在してゐる。北部には西藏高原やタリム盆地があり、其處から崑崙山脈がそびえ立つてゐる。此の崑崙山脈は遠く延びて、中部支那平野になり、支那の「萬里の長城」の造られてゐる懸崖を構成してゐる。

だが、地理學的には日本の南部山脈は此の集團の一つの連續をなすものである。ゴビ沙漠はシベリアの諸大河の水源をなしてゐる一連の大地帯によつて北西に境界づけられてゐる。西方に於るアルタイ山脈から發して、南アルタイ山脈は南東に走り、その他の地帯は東及び北東に擴り、ヤポロノイ山脈に終り、蒙古高原からシベリア大平原に涉つて、通行容易な經路を構成してゐる。此れ等の地域の大きな溝は人類史に貢獻を與へた。即ちそれ等はその高原地帯から西方に向つて蒙古遊牧民の通路となつたものであるからである。

大陸の約五分の二は高原から成立して居り、平原を互に分割してゐる之等の地帯並びに高原は種族發展の母胎となるものであつた。此の高原地帯のあるものは殆ど半沙漠地帯であるか、或は沙漠地帯であり、其所には眞にオアシス型の文化が發達したのであつて、通常斯る文化は民族大移動によつて踏襲されたのであつた。その場合若干の地理的な、或はその他の變動があつた爲に、このオアシスを可能ならしめてゐるデリケートな均衡が阻害せらるゝに至つた。人種學的見地から見ると興味ある高原及平原は先づ第一には北の大凍土帯であり、そこでの生活は唯特殊化された條件の下に於てのみ可能であるのだが、これは北アメリカとの人種學的結合として役立つ所である。北部及び西部に

於ては山嶽並に森林によつてこの最後に名付けられた地域から分離され、南方には常に效果ある境界とはなつてゐない所のゴビ沙漠は人種史上大なる興味を有する第二の高原地域であつた。天山山脈と崑崙山脈との間の大盆地は、一つのオアシス文化が発生したのであつた。だがたとへ、この地域がアジアの歴史上重要性を持つてゐても人種學的には重要性を持つものではない。ゴビ沙漠からは興安嶺の懸崖によつて、タリム盆地からは崑崙山脈によつて、南方からは折重なる數々の山脈によつて分離されてゐる。支那の大中瀆平野は、黄河と揚子江の二大河の三角洲を構成してゐる。構造的には大部分、上流から齶されたものによつて蔽はれて居り、人種學的にはその地域から流れ込んだ種族から構成されてゐるのであるが、それにもかゝらず、一つの驚くべき特徴型を發展させたのである。印度の大平野は效果的に爾餘の大陸と遮斷されて居り、殊に北東から遮斷されてゐる。そこで偶々此の地域に入つて來た大抵の移民は西部から入りこんだものである。西部アジアはイランの大平原を含み、政治的には分れてペルシヤ、バルチスタン、アフガニスタン、アナトリアとなつてゐる。而してそれ等はアルメニヤやクルヂスタンの高地によつて構成された橋土で、先きの高原と連結し、大メソポタミヤ地域によりアラビヤ高原と分離されてゐる。此の高地の北部に橋土たるイラン高原が北東から發しシベリヤの大平原となり、さては北部の凍土地帯に擴れる平原をなしてゐる。

之等高原の多くのものは群島の形態で海にまで續いて走つてゐる。アジア大陸の邊境地帯は世界で最も大なる、或る場合には最も稠密な人口を容してゐる。我々の現在の研究目的上、其れ等は分れて五つの集團となるであらう。アリューシヤン群島は既にアメリカとの關係に於て述べた所である。日本群島はこの最も廣き意味に於てカムチャツカから臺灣に至る迄の群島線を包含してゐる。我々は此の中に次のものを含めよう。

(一) 千島及び樺太

(二) 日本本土、尤も人種學的には北海道（日本の北部の島）は日本本土によりは權太に屬してゐる。

(三) 琉球列島

(四) 臺灣

第三のものは多くの點で第四のものと異つて居り、一つの顯著な集團即ちフィリッピンに屬するものである。東印度群島、通常オランダ及びドイツの著者達によつてインスリンドと呼ばれてゐる所は、一系列の群島から構成されて居り、或るものはその規模大きく、一方ではアジアから太平洋上の諸島に、他方ではアジアからオーストララシヤに至る橋土を構成してゐるのである。第五の群島系列は不明確な集團であるが便宜的にインド群島と呼んでおかう。本土と密接なつながりを持つセイロン島、アングマン及びニコバルの一層孤立的な集團等が此の中に含まれる。アジアと云ふ大規模な大陸は元來數多くの河を容して居り、或るものはこの河長が極めて長い。

之等は、すべてではないけれども、人類史上等しく重要な役割を演じてゐる。アジアに棲する民族考察上、極めて重要性を持つものは次の四集團である。

(一) メソポタミヤの大文明を可能ならしめたチグリス、ユーフラテス兩河。

(二) 揚子江及び黄河、此の兩河、殊に黄河は漢民族播藍の地となつた。

(三) 印度の諸河

(四) 北部の大河

之等四つのものは夫々アジアに於ける人種史上異つた役割を演じた。アジア北部の諸河を除いて、大部分の大河は夫々、人種に與へた其の影響力まことに大であつた。第一の二つの河は共に生活が集中された一つのオアシスを構成

して居り、隣境地帯に比較して土地が肥沃であつた事によつて今日でも我々が記録を有する初期の時代から色々の型の種族が會合せる地域を構成したのであつた。直接之等の河によつて影響を受けた地域は比較的小さいのであるが、この恵まれた地理的位置のために古代史上巨大な重要性を持つてゐる。黄河は一つの極めて異つた役割を演じた。それは支那史上緊密な聯關を持ちながら、一方には生命の附與者であると共に他方では破壊者であつた。黄河は老大な量に上る泥濘を齎し、暫時隆起して打續きその結果平野の中を流れるよりは平野の上を流れることゝなつたのである。時たま、これは堤を破り巨大な地域に涉つて水が擴つた。こゝで大なる生活の破壊が惹き起されて來る。歴史時代に入つても相當河の流れが變動した。それ故黄河は上述せる諸河とは異つた範疇に屬するのである。揚子江と共にそれは一つの驚くべき肥沃な平原を作り上げた。その起源を河に持ちながら、支那大平野は、メソポタミアがその河に依存するものとは異つた關係をこれに持つてゐる。前者の場合、平原には極めて宏大に打ち擴げられた平原全體に涉つて人々が住居して居り、その土地の肥沃が河に依るものではあるけれども、遠く狭い河谷にまで打ち擴がつて居る。印度の大河は又支那の諸河が演じたものとは極めて異つた役割を種族史上演じた。北部に於てインダス河の影響はナイルの影響と密接に平行的なものである。東部のガンガ河谷はその幅に比して長く、暑い肥沃な地域を成してゐる。植物の生長に極めて好適な條件を成してゐる爲に、人口密度は極めて大なるものとなり、又河谷とアジアの南東部の交通が可能である爲に、多くの點でその他の印度とは異つた人種史を持つてゐる。ナルバタに依つて北部と遮斷されてゐる南部印度の諸河は異つた機能を持つてゐる。西方に流れてゐる唯一の重要な河はナルバタ河及びタブチ河である。其の他西ガート山脈は接近困難なる沿岸となつて居り、東に見えるデルタ上に人口が集中されて居る。然し乍らどの河も人種學的な重要性を持つものとは思はれない。

大きな長さと同規模を持つてゐるにもかゝらず、アジア北部の諸河は北部大平原の人類史上極めて重要な役割を演じたのではなかつた。だがロシア定住地の分布を示せる地圖を吟味して見ると、之等の河が文化や體質の相互浸透を可能ならしめる一つの媒介體として役立つたものである事を極めて明瞭に示してゐる。ロシア人の分布地圖はオビ河、エニセイ河、レナ河、及びアムール河に沿つて長く進展してゐる事を示してゐる。大抵の圖は河線に沿つて人口集中が全く明瞭にされて來たのである。

アジア大陸の規模が極めて大である爲に氣候も極端な相違を示してゐる。即ち此の極寒から、南及び南東部の極暑に至るまでの氣候が示されてゐる。亦、湿度の高い熱帯森林地帯の空氣から沙漠地帯の乾燥せる空氣に至る迄變動を見せてゐる。赤道の附近では氣候は比較的一様である。我々は現在氣候が變る事によつて與へる人類學的效果については殆んど知る所ないが、それが可成りあるものと認める事は妥當であらう。

北部の極寒は次の事實に基く。即ちツラン及びシベリアの低平原が極めて高い山脈の障壁に依つて暖い南風の影響をさへぎられてゐると云ふ事である。それ故冬はそれに相當するアメリカの地域よりも一層嚴しいのである。アメリカでは一般に山脈が北及び南に走つてゐる爲に大平原は北極の影響を受けると共に、又熱帯或は亞熱帯の氣候の影響を受けてゐる。

人類學的研究の觀點から植物は大なる範圍に涉つて具體的な形態に於て氣候條件に依存するのであるから、氣候と植物地帯と併せて考察する事が最も便宜である。極北地方はツンドラであり、その北の限界は北極界、南の限界は最も暑い月ですら華氏五十度の等温線で區切られてゐるのである。一般的にその北の限界は凍土地帯と云つてよろし

實際に大陸の東の涯はツンドラであり、ツンドラのな氣候條件は少くも大範圍に涉つてチベットの或る部分にまでも形成されてゐる。冬には殆んど降雪がなく、而も下層土は決して溶ける事がない、風は高く吹くので雪は地上に深く積らない。然し乍ら、冬の寒さは待機期間を必要とするので、大抵のツンドラ住民は氣候の厳しさを避ける爲に森林地帯に逃避する。冬が終ると共に急激な生の活氣が蘇つて来る。植物は生長し初め、ツンドラの住民は森を離れ、再び北に進む、此の地方は極端な荒廢、單調に特徴づけられてゐる。樹木は何らなく、唯、灌木のみがあちこちに生ひ繁つてゐる。そして最も特徴的な動物は馴鹿、齧齒類動物等である。ツンドラの南部には松拍科の大森林が見出され、此等の樹々はラリクス、スベリカ及びアビエス、スベリカ等由つて特徴づけられて居る。之等のものは暫時落葉樹森林の占むる所となり、今日英國の森林樹木には大部分馴染み深いものとなつてゐるものである。そこには亦、英國の草地や仕切樹と同様な植物の生えた森林牧草地がある、森林並に牧草地は暫時草原に變つてゐる。一般に、この境界はイルティシ山脈、アルタイ山脈及びヤプロノイ地帯の南にあると考へられよう。尤も草原地帯は興安嶺の東部にまでは延びては居らない。

草原地帯は便宜的に降雨量によつて二つの型に分けられよう。第一のものは豊かに草の生えた草原地帯である。之等のものはジベリアの大草原地帯であつて、北緯五十度―五十五度の間にある。即ちオビ河の遙か東にある譯だ、之と同様な草原地帯がアルタイ山脈及びヤプロノイ山脈の南にあり、亦チベット高原に發する河の上流の谷に、亦ツランの一部に、イランの西南部にある。

貧弱な草原地帯として記述される地域は五ツある。屢々沙漠地帯に迄涉つてゐる。

(一) ツラン地域、カスピ―アラール―バルカス地域、トルコマン沙漠が含まれる。

(二) タリム盆地のタクラマカン沙漠

(三) ゴビ沙漠

(四) アラビヤ沙漠 此れはアフリカのサハラ沙漠の連続である。此の地帯の住民も亦、北アフリカの住民と同様な特徴を示してゐる。

(五) イラン及びアナトリアの高原。實際總て之等の地域は殆んど十インチを越えない降雨量である。

此の地域の南部には亞熱帯地域があり、それは便宜的に西部地中海地域と分離されてゐるのであるが、冬でも降雨がある。そこで最も典型的な樹はテンニクワ、オリブ、無花果、柘榴、常緑櫟等である。更に東部地域は夏に降雨があり、通常支那日本地域として知られてゐる。此處で植物や人類の型の型は地中海に典型的なものとして我々に馴染み深いものとは極めて大なる差異がある、だが然し之等の差違にもかゝらず。此二つのものが亞熱帯的特性を持つてゐる事を記憶するのは重要であるし、亦それ等の差違を研究するに際して環境の一般的近似性が忘れられてはならない。更に南方には大なる沼澤地帯があり、熱帶的牧草地帯がある。この中には南アラビヤ、印度、印度支那、セイロン高地及びマレー群島などが含まれる。南アラビヤはアジアの大草原とよりはアフリカのそれに一層緊密な聯繫を持つものである。

此の沼澤地域の總てではないけれども大部分は極めて高い降雨量があり、其の氣温と同様に牧草地は様々な種類の樹木の存在によつて特徴づけられてゐる。西ヨーロッパに於て牧草地や森林が文化の發生地となつた如く、南東アジアに於て人々は最も良く發展し得る地帯を熱帯大草原に見出したのであつた。此の事は重要性を持つものである。何故ならば、西ヨーロッパ大陸に於ては大部分の種族は明らかに森林牧草地帯にある氣候條件に體質的に適合する様に

なつたからである。アジアの大部分の住民は熱帯大草原の氣候條件と體質的に一層緊密に結び合つた様に思はれるからである。

大草原の南部並びに低地帯には熱帯森林を發生せしむるが如き極端な熱帯氣候型がある。溫度は或る沙漠地帯に於ける程高くはないが極めて高く、激しい降雨量があり高い比濕をもつてゐる。森林樹木の發生及び森林の繁茂は、他の地域に打ち擴がつてゐるものとは極めて異つた條件を作り出してゐるのである。之等の條件が人類に極めて大きな影響を持つたと云ふ事は殆んど疑ひ得ないのである。赤道森林地帯に住む典型的な住民は、アジアによりは寧ろアフリカに屬してゐる。だが、アジア大陸の森林地帯に住む一定住民は、彼等の住んでゐる極めて特別な條件に密接な關係を持つ様に思はれる所の特徴を持つてゐる様である。

第二節 白色人種と褐色人種

體系的人種學者はアジア人種を随分あれこれと分類し學名を附してゐる。之等の差違は採擇基準の差にも一部は基因し、一部はまた學名の違つた使用法にも基因してゐる。或る場合には同一の名辭が違つた事象を意味する爲に用ひられ、亦同様に異つた命名が實は同一の人種名を指してゐる事が見出されるであらう。私が興へんと思ふ命名を附與する前に現在教科書に一般に採用されてゐる分類を示して置くことが便利であらう。

ドニケイ(s) (G. Deniker) は十一の人種のある事を主張し、この中、ドラビダ族、アッシロイド族、インドアフガン族、アイヌ族及蒙古族の五種族をアジア特有の種族としてゐる。この外、他の大陸にも涉つてゐる種族として、ネグリート族、インドネシア族、アラブ族、ウグリア族、トルコ族、及びエスキモー族の六種族を擧げてゐる。其の分

布を彼は次の如く定義してゐる。エスキモー族はアジア大陸の北東部に、アイヌ族は樺太、北海道或は恐らく日本の東北地方に棲息する。ウグリア族はエニセイ族變種によつて代表されてゐる。蒙古族は殆んど全アジアの地域に涉つて見出され、此の南に二つの二次的種族に分れてゐる。トルコ族は中央アジアの内部に限られてゐる。インドネシア族は印度支那、日本からアジアの諸群島に於る諸島に數多く、之に反しドラビダ族、インドアファン族はインドに限られる。印度アファン族は亦、アツシロイド族及びアラビヤ族と相並んでアジア前部に見出される。ネグリート族の代表はマレー半島及びアンダマン諸島に棲息してゐるが、此の八種の要素はやはり印度支那及び恐らくは印度住民の居住せる地域に見出される。この分類は包括的にして便利な分類であるが、我々がそこに用ひられる名辭を研究する場合に困難が見出される事になるであらう。その若干のものは本質的には言語學的なものであらう。トルコ、ウグリア及びドラヴィダ等は既に知られた言葉、又は言葉の集團を意味して居るのだが、之等の言葉の使用が體質的人類學に適用される場合には不十分なものである。何となれば體質類型と言語類型とは決して相關して居らないからである。ドニケ自身も言語的な觀點からか、或ひは體質的觀點から彼の分類の困難を認識して居つた様である。彼はアジアの種族を委しく取り扱ふに際して、その分類の大部分を放棄して居た様に思はれる。

ジョイス(J. A. Joyce)は次の如く述べる。蒙古族は分れて北蒙古族と南蒙古族の二集團に分けられる。北方族は滿洲族、朝鮮族、モンゴル族、トルコマン族、トルコフィン族及マヂヤール族であり、南方族は日本族、印度支那族、西藏族、及マレー諸島の住民のあるもの、之である。それらの集團内部の小分類を彼は人種的家族と云ふ言葉で記述してゐるのであるが、更に此の言葉に依つて何を意味するかと云ふ事を正確に定義する所なかつた。だが然し、彼が用ひて居るモンゴリアンと云ふ名辭とドニケのそれとは極めて相違してゐる事が知られるであらう。

ハッドン(A. C. Haddon)は上述のドニケ、ジョイスとは異つた分類を試みてゐる。彼は次の如き分類を認めてゐる。

先づ第一はモンゴロイド人種である。此の種族が短頭型であると述べる以上、ハッドンは一步を進めて記述してゐないけれども、彼の第二の集團たるアルプス人種とは區別してゐる。アルプス人種についてはアジアに於て短、長、兩方の身長を持つるものと見てゐる。

第三に彼は二つの主要なる短頭族たるトルコ人種とウグリア人種を擧げてゐる。之は疑ふべくもなく多少とも共通の起源を持つものであつた、と彼は説いてゐる。通常之等の種族は原北方人種とアルプス人種とが早期に混淆したものだと言張されてゐる。時として其れ等は蒙古族とも混淆したと云ふ。更に他方ではモンゴロイド人種とアルプス人種との中間的種族の後裔であるかも知れないと思はれる。偕、ハッドンによつて、體質的に異つた四ツの人種が擧げられてゐるのであるが之等は總て、共通なる短頭型の特徴を有してゐる。トルコ人種とウグリア人種は其の根元をアルタイ山脈及びエニセ河上流に發見することが出来るやうであり、恐らく、古代スーメリア人の祖先であつたかも知れない。ハッドンの次の種族はブルーネットの長頭型として記述されてゐる。ハッドンによればこの種族はアジアの南東部に散在してゐる。

例へば南支那の蠻子族、インドネシア族恐らくは亦ドラヴィダ族の本質的要素をなしてゐるなど之である。それはスミス(Elliott Smith)の褐色族と符合してゐるやうに見えるけれども、何か之よりより廣範な分布を爲してゐるやうに思はれる。

ハッドンは原マレー人をモンゴロイドの短頭型として定義する事については極めて慎重な態度を持してゐるやうで

ある。しかもその定義は大なる重要性を持つてゐる。この點については大抵の斯學の權威者の見解と一致してゐたのであつて、マレー諸島の住民間にある疑ふべからざるモンゴロイド的要素が決定的に此の名で呼ばれるならば、大變有利となるであらう。然しながら、ヒルドリツカ⁽¹³⁾ (A. Hrdlicka) は其れをインドネシア族と混同してゐるやうである。勿論、其の混同は純粹に用語上のものである。而して私が理解し得る限りに於て同様な用語の差がニアスに關するドウ・ツヴァン⁽¹⁴⁾の流麗な論文の中に現はてゐる。アイヌ人はアルプス族の外住者としてハツドン⁽¹⁵⁾は考へたのだが、この説は後の著書で修正した様である。

最後に黒色羊毛人種の中の倭少人種の代表者としてネグリート族、アングマン族、マレー半島のセマング族、フリツピン⁽¹⁶⁾のアエタ族、ニューギニアの矮少族を擧げてゐる。身長の高いものとしてニューギニアからクスマニアに渉るクスマニア人、パプア人、及びメラネシア人の原基族等に著しい。

ハツドンの小著に示された多くの鮮しい提案を刻明に批判する事は困難である。最近彼は別の分類を提案した。此の新しい分類は始めジュフリダ・ルジェリ⁽¹⁷⁾ (V. Giffrida-Ruggeri) に依つて述べられたのであるが、ハツドンは彼の著書たる人類學⁽¹⁸⁾ (The Races of Man, Camb. 1924) の最後の版で若干の修正を加へてそれを採用したのであつた。その分類は簡明にして直接的であり、然もラテン語を使用する事によつて同じ名辭に觸れる異つた意味から來る混同を避けんとしてゐる。ネグリート族はさて置き、アジアの住民はリュコデルムス (Leucoderms) 及びサントデルムス (Xanthoderms) 即ち白色系と黄色系に分割される。リュコデルムスは長中頭系と短頭系の二つの集團に分割される。長中頭系は更に分れて三つの亞類に分れる。インドアフガヌス、イラノメデイテラヌス及びインドイラヌスが即ち之である。インドアフガヌスは長頭にして狭鼻、中から高までの身長である。アフガン族、バルチー族、

カシミリ族、ダルヂ族、ラジプト族、バンジャビ族、シク族等がこの中に含まれる。之等のものが特徴化された地域はヒンヅークンとスレーマン山脈との間であつたと云ふ事が云はれて居り、そこから彼等は北印度及び恐らくは東方に擴がつたものであらう。この體型はリズレーのインドアリアン型に密接に一致してゐる様に思はれる。イラノメデイテラスはハツドンに依れば何か不明瞭な集團として記述されてゐる。中頭型にして狭中鼻形、身長は中から長に渉るものを示してゐる。部分的にはリプレーのイラニヤ型(1)に一致してゐる様に見える。この中にはベルンヤ人及近東中東の様々な種族が含まれてゐる。頭形指數は約七六、鼻形指數は約六一—六三であり、身長一・六三—一・六六(六四インチ四分ノ一)であつて、その他の特徴は地中海型に一致してゐるので地中海型と呼ばれた方がいゝかも知れない。之等のものは主として西方に漂泊してゐる集團の代表種族として認められかも知れない。

インドイラヌスの中にはバルチー族、デワール族、ブラユイ族、等が含まれる。中頭型と短頭型狭中鼻形の限界の頭形を呈してゐる。身長は中から長に渉る。之等のものは中間型又は混淆型として認められるであらう。

白色短頭系はジョルジアヌス、及びアルメノ・パミリエンスの二集團に分れる。前者の中にはグルツスイニ族、スツニ族、ミンダレリ族、及びイメリ族が含まれる。この型のものは短頭の氣味があり、強度の狭鼻型であり身長は中である。アルメノ・パミアンシスはジュフリダ・ルジェリとは少しく異つた見解を持つハツドンに依つて二つの分類がなされてゐる。第一のものはパミリア族又はイラニア族であつて強度に短頭狭鼻型、身長は中から長に至る様相を示してゐる。第二のものはアルメニア族であつて高頭、垂直後頭、極端に際だつた鼻、高身長等の特徴を持つてゐる。

アジアのサントデルムスは三つの主要なものに分割される。即ち中頭系、第一短頭系、第二短頭型が之である。中頭系の中にはプロトモルフス、パレアクテイクス、チベタヌス、シニクスが含まれる。プロトモルフスの中には所謂支

那及アツサムの原住種族が含まれる。之等のものはサントデルムスによりはリユコデルムスに一層緊密な親縁關係を持つものであらうとハツドンは附け加へてゐる。我々が其れ等のものをジュフリグ・ルジェリの圖式にあてはめるならば、イラノメデイタラヌスの領域を廣めるか或ひは一つの分離した集團を作るかしなければならぬ。パレアクテイクスは唯部分的に此の集團に屬するに過ぎない。パレアクテイクスの或るものは圓頭型であるから體質的な分類よりは文化的な分類と云へる。然し乍ら此の集團に屬してゐない他の種族の中に發生したのは平頭型によつて區別されると言はれてゐる。チベタヌスの極く僅かな部分のものが中頭型の中に含まれてゐる。その典型的な種族はレプチャ族及東方チベット族の如き種族である。第四の亞類はシニクスであり支那人がこの中に含まれる。

第一の短頭系集團の中にはアルタイクス及ネアクトイクスが含れてゐる。アルタイクスの中には多くのアルタイ族が含まれ、ネアテキクスの中にはチエクチ族が含まれる。

第二の短頭型集團は四ツの亞類を持つてゐる。ビルマ及アツサムに見られるメリディオナリス、パレアクテイクス及チベタヌスの分岐たるブラキモルフス、滿洲族、南ツングース族、ブリアート族及その他のトゥルグートやタランチを含む蒙古族、セントラリス、及アフガニスタンのハザラが即ち、之である。

此の様な圖式の下にハツドンの加へた註譯は興味あるものである。

「以上の配列は主として頭形指數、鼻形指數及び身長に基いて居り、余はジュフリグ・ルジェリの配列を少しく修正を加へて借用した。彼がアジアの種族的人類學的混亂狀態を解剖學的資料に基いて統一したことは試に興味ある所であるけれども、まだ分類し得ざるものが若干ある。他の特徴に關する考察は疑ふべくもなく、彼の圖式の修正に導くであらう。」

此の批判は圖式の最弱點に注意を拂つてゐるのである。著者は又、生物測定學派に何等の關心を寄せて居ないのである。即ち指數の信頼度の表示に關してそうである。

比較的微細な分類は特に深刻な障害に逢着する所のものである。疑ひもなく地方的な分類たるものゝ如く思はれるものを認識する事は可能であるけれども、更に人類をより細く分類して行くと、互に緊密な繋りを持つてゐる様に思はれるので、其れ等のものが同一系統に屬するものであるか、それとも他の地方的環境的原因に基くのであるかの問題に屢々疑惑が生じて來るのである。微細な細分類は相互に混淆し合つた集團を掩蔽し、しかも屢々異つた種族の混淆を考察する事に失敗してゐる。例へば我々がジユフリダ・ルジェリの主張した提案を論理的に跡付けて行く場合、半白半黃の集團に逢着せねばならぬ事となる。而も彼に依れば人種は何れかの集團に屬せねばならぬと主張してゐるのである。我々が純粹に生物學的觀點からアジアの諸種族の分類に接近し、更に我々が考察して來た大多數の著者達が他の規準を考察に持ち込むものであることを併せて考へるならば、我々は少くも假に三つの主要なる人種を採擇して宜しいであらう。尤もそのどれもが常に純粹なものとする事が困難な程、相互に混淆し合つてゐるものではあるが、人種は混淆し而して混淆の結果は極めて緊密なるものがあつた爲に一つの合成物となつた。而して高度な散布度の代りに低度な散布度が純粹な人種の中に見出される。だが然し此の事實にもかゝはらず、比較的大なる分類を固守し、其れから岐れた分類を無視する事は研究目的上より明確なものゝ如く思はれる。三つの主要なる人種は次の如くである。第一のものはヨーロッパ民族に近い大民族集團であつて、之はブルーメンバツハがカウカサス族と呼んで以來、屢々言はれて來た型であり、極めて屢々白色人として知られてゐるものである。第二集團は黃色人として知られてゐるものであつて、蒙古族、モンゴロイド族、等が之である。此の名前に就て私は後説する所があるであらう。

第三集團はネグリート族である。アジアの種族の吟味に於て赤色人の人間集團を第四のものとして附加する事は安當である。何故ならば疑ひもなくアジアには北アメリカの原住民に密接な親縁關係を持てる種族が存在してゐるからである。だが我々はそれ等を黄色人の特殊化された分岐種族として考察する事にしよう。

楮、ヨーロッパの諸種族に近い人種は次の如き特徴を持つ事によつてその他の種族と區別される。明るい、即ち褐色の毛髪はこの種族に至る有用な導きである。だが大抵のアジア人種の毛髪は黒色であり、眼は褐色である。頭形指數には有用な導きとなるものであるけれども常に價値を持つものではない。我々が論じてゐる人種は極端な變動の跡を示す指數を持つてゐるものである。他方に於て、現在、我々が知る限り黄色人の代表者の中には長頭型が表れてゐない様であり、集團の平均は常に中頭又は短頭の傾向があるやうである。それ故、我々が特殊の集團がその人種に屬してゐるか否かについて判定を與へ得ない様な場合に、頭形指數は時として絶對的な導きとなるものではないけれども、一つの有用な導きとなるものであらう。

毛髪組織は、常に好適な規準をなすものではないけれども、屢々一集團と他集團とを區別するのに役立つであらう。ヨーロッパ人種に近い人種は常にではないが、屢々波打つた或ひは縮れた毛髪を持つてゐる。而して時として直狀毛と羊狀毛のネグリートとの混淆は波狀毛髮型を惹き起すであらうけれども、通常はヨーロッパ及びアジアに於ける其の同類者の波狀型とは全く異つてゐるものである。

皮膚の色は一見好適な導きとなるものゝやうに思はれるけれども、白人に近くして而も黒色の肌色を持つ人種を發見する事がある。黄色と白色との中間の褐色を呈してゐるものもある。然し乍ら第一集團と第二集團との識別點は皮膚に黄色の色合があるが、どこかにある。身長、鼻形指數及び他の測定値は、地方に分散せる種族の識別には屢々力と

なつても、此の場合は殆んど役に立たないものと考へられる。だから兩種の集團を識別する場合には我々は複合的な特徴を取り上げて行かねばならない。

私がヨーロッパの住民に近い何か扱ひ難い人種として記述した種族は、若干の集團に分類されるであらう。我々は既にリブレが北方型、アルプス型、地中海型の三つに分類せる事を見て來た。最近の觀察者はリブレの立場、殊にアルプス型と地中海型人種に或る程度まで賛同してゐる様である。之等三つの人種はリブレ自身が示した様にアジアに現れてゐるものである。それ故、詳細に涉つて論議せねばならないであらう。北方型は身長高く、長頭に於て明白の毛髪を持てる種族である。之等のものはリブレの説ける主要な特徴である。通常男性の間には眉の邊りにしつかり縁どつた筋肉組織が見られ、骨格は男性・女性共に大である。頭蓋容量は大きく、頭蓋骨は充分發達して居り、横顔はカインしてゐる。鼻は通常相對的にも絶對的にも比較的狭く長い。顎は屢々重く、殊に初期の標本を見るとそうである。今日前北方型及原北方型について語る事が通常となつた。之等は、大部分現在の北方人種の分布の證據に基いた想像である。だが我々は現在原エジプト人の解剖學を記述し得ると同様には原北方型の解剖學を記述し得ないのである。

北方型の特徴を持つた現在の地域はスカンデナヴィヤ半島である。その起源地は後に説かれる所である。彼等は西ヨーロッパに見出されるが、バルチック地域を距るにつれてその數を減じてゐる。一時彼等ははるか南部に浸透して居つた様に思はれる。而して彼等がスーメリア人口の指導者となつてゐたと提案してゐる者もある。だが然し、現在我々は此の點で明確な證據を持つものではない。オックスフォード解剖學教室の蒐集にあるテベドの古代人の頭蓋骨の間には、直ちに北方型と考へられねばならない標本がある。若し果して然りとすれば、彼等は恐らくその他の異質要

素と共にアジアからエジプトに浸入したものと思はれ、北方人が其の地方の人口にどれ位の要素を形成したかについては疑しいけれども、之等の種族の存在を證明してゐるものと思はれる。此の長頭型を古代地中海沿岸に見出すことは特別の興味をそゝるものがある。と言ふのは、或る著者例へばシュフリダ・ルジエリ(Gunfrida-Ruggeri)やフルヒール(H. J. Fehre)等は地中海沿岸人と北方人との間に何等窮局の差違はないものと信じてゐたからである。

所で此の二つの種族は頭形指數を除いて、殆んど共通點を持つてゐないのである。北方人は北海地域の北部に棲息してゐたのであり、之等のものが時に地中海の方に進出したと云ふことは珍しい。例へば今日英國では元來地中海住民を之等の島嶼から追放つた北方人が今や地中海人によつて没却されつゝあると信ずる觀察者がある。之は兩種族が同一幹族から出た二分岐であると云ふことを附加的論議として表明してゐるのである。全體としては可能であるけれども、之はありさうもない様に考へられる。

北方人がアジアに存在すると云ふことは、既に述べた如く可能であるけれども、現在では他の種族との混淆を除いて、存在すると云ふ適切な事例が存しない様に思はれる。又、スーメリア人の間に存在すると提案する著者達も其の論議を裏付けるやうな頭蓋骨による證明を何等有してゐないやうである。然し乍ら、原始北方人に恐らくは近いやうな型の大人口が存在してゐる。

我々が地中海の西部高原地帯から南東部に進むにつれて、大部分の住民が同一種族に屬してゐるものなることを知る。此の地域では殆んどの方が白色の皮膚を呈してゐるものではなく、褐色である。彼等は弱々しい體軀の持主であり、寧ろ小軀、長頭である。毛髪は直毛或は縮毛であり、眼は褐色である。顔や身體には殆んど毛が存しない。横顔を見ると最も顯著な特色は後頭部頭蓋が突起してゐることである。前頭は滑らかであり、寧ろ隆起してゐる。眉峰の

發達が貧弱であるために、「ミケランジェロの棒」と云ふ名の下に有名になつた強力な表情を缺いてゐる。此のやうな眉峰のないことは疑ひもなく此の種族特有の筋肉の缺除することによるのである。更に頭蓋骨を見る場合に、顎が輕やかに作られて居り、觀骨は細く、筋肉が殆んど缺除してゐる事が知られる。

更に東に進むにつれて、我々は皮膚の色が次第に暗褐色になつてゐるのを見出す。殆んど黒色の皮膚を持つ南部印度やセイロン島の住民は以上の種族と餘り違はない頭蓋骨を持つてゐるやうに思はれる。又これは大部分のエジプト住民の一般的敘述に於ても貢獻する所のものであらう。エジプト人の特徴はエリオット・スミスによつて古代エジプト人のと云ふ書物の中で輝しくも敘述されてゐる。即ち地中海の東沿岸の多くの住民、及メソポタミヤの大部分の人口等が、スミスに依つて美しく描畫された。印度及び其の他の熱帶地域に住む種族を持つ特徴は鼻形指數が他のものよりも極めて大きいことである。之は第一章で述べた如く殆んど環境的條件に基くのである。更に東方に進めば、此の褐色種族の最後の進展の跡がネジオト族として現れてゐる（インドネシア人）。

上記せる全種族は夫々の種族の間の差違は大きいけれども、大部分は次の三つの特性を夫々有してゐる。第一は皮膚の色、第二に身長、第三に鼻形指數が之である。

之等詳説して來た假説が正しいとするならば、褐色族として考察して來た人種も分れて數個のものに概括されることになる。先づ西方では褐色族の中心地として、地中海族がある。次には印度である。印度に居るものについては決定的な名前が與へられてゐない。ドラビダ族は之と最も深い親縁關係を持つてゐるであらう。第三には東亞諸地域である。之はネジオト族と呼ばれる。

以上の外に更にヨーロッパ族からの分岐種族が残存する。之はリプレによつて命名されたアルプス型である。最近

の論文を見ると、ヨーロッパに於ては、アルプス型は分れてアルプス型とデイナル型との二つに分ける方がよい様である。デイナル型とアルプス型との相違は特に前者の身長が後者よりずば抜けて大きいと云ふ點に求められる。此のアルプス型とデイナル型の兩型がアジアに居るとする事はありそうな事と思はれる。此の種族の第三の分岐はアルメノイド型として知られてゐるが、之は西部アジアに於ける最も重要な要素の一つである。此の分岐種族は又西部アジア人種 (Asiatische Rasse) 及びヒツタイト (Hitite) 族と呼ばれてゐるが、多くの學者は之をアルプス型からの分岐種族として別に區別して居らなす。

總て此の集團に屬する種族は圓頭型の地中海種族及北方種族と異つてゐる。之と共に頭蓋骨の一般的構造も非常に異つてゐる。顎骨は廣く屢々充分に發達してゐる。此れは廣い頭蓋基底と關係あるものであらう。鼻は時として極めて充分に發達して居り、眼立つて大きい頬は廣い傾向があり滑らかに平面を呈してゐる。眉峰も大きからずして充分良く發達してゐる。毛髮組織は第一集團のものより一層豊富であり、顔面及屢々身體に毛が豊かに生えてゐる。

エリオット・スミス (Elliot Smith) は之等の種族を古代埃及人として其の著書中に記述してゐる。スミスが先づ注目してゐるのは顔面であつて、之等の種族は元來長頭型であるけれども、等しく大きい頭蓋容量を持つてゐる。或る場合長頭型のものと共にすら發見されると云ふ事は別に驚くには當らない。何故なら、殊に一定の人種混淆が行はれた場合に於て、集團の正規的變動は常に大きいからである。一般に之等の種族は顯著に丸型の頭である。多くの場合、頭は際立つて高く、後頭部は平たい。之は地中海種族と著しい對照を爲してゐる。之等の差違が頭蓋容量に於ける差違と相關々係を持つてゐる事は認め得るであらう。地中海人は小さな頭蓋を持つてゐるのが傾向として認められるが、一方アルプス人は大きな頭蓋を持つ傾向がある。この規模の増加を調整せんが爲に丸型の頭を持つ傾向がある。

だが然し、頭蓋骨の基底が長い場合には、頭のサイズの増加ですら丸頭型を確保するに役立つまいであらう。

頭蓋指數が影響されるばかりでなく、また頭の高さもその中に入れて考へて見なければならぬ。前額部の形態も亦異つてゐる。頭の頂が高く、ドーム型のやうになつてゐる場合には前額は直立型をなしてゐるのであるが、頂が平たい場合にはスロープを爲してゐる。此の様な相違は疑ひもなく、二つの種族に於ける個々の頭蓋のもつ構造的必然性に基いてゐるものと思はれる。

アルプス人種の間に於ける顎骨の形態は通常極めて際立つた特徴をなしてゐる。地中海族に於て顎骨は通常小さい。上走岐骨は相對的にも絶對的にも廣く、S字型の切目は淺い。

此のやうな型の顎骨は屢々長頭型と關係を持つて居り、一般的形態に於て多くの原始長頭種族の顎骨と似てゐる。他方アルプス族の顎骨は長く狭い上走岐骨を持つてゐる。S字型の切目は深く嚙狀過程は長い。エリオット・スマスは之等二種族の差違を論ずるに際して、上述の諸特徴に注意を引いて居り、之等が人種的特徴に屬するものであつて、決して環境的特徴に屬するものではない事を強調してゐる。此の論議自體、疑ひもなく重要な價値を持つてゐるけれども、この點についてトムソン (Thomson) は環境及び特性は後に人種的性格に晶化される所の特徴形成に當つて重大な役割を演ずるものである、と主張してゐる。

眼窩の形態はエリオット・スマスが既に指摘せる如く之等二つの小集團を區別するもう一つの便利な方法である。アルパイン型に於てはそれは傾斜してゐるが、地中海型では眞直ぐである。然し乍ら此の眼窩形態が一部は顎骨形態と、一部は鼻の構造と相關々係があると云ふ事は妥當ではない。環境と相關的なものとして示された鼻形指數はさておき、通常アルプス型はヨリ大きな、而も一屬隆起せる鼻を持つてゐる。

之等の種族を區別するに採用される其の他の特徴が存するけれども、上述のものは其の中でも最も重要なものである。廣頭型種族は恐らくアルプス型に屬するものであらう。エリオット・スミスは之を親縁族としてゐるが、之はリプレーの云ふアルプス族と共に疑ひもなく其れに近い他の異種族も包含せしめてゐるのである。

ヨーロッパでは之等のものは眞のアルプス族を包含してゐる。即ちリプレーが廣頭、中身長、褐色眼として記述したものである。之等の種族は廣くアジア洲に分布してゐる。ヨーロッパの或る部分、殊にアドリヤ海の東岸地帯には一つの型があるのだが、之に就いて、或る著者、特にドニケは、アルプス型の明瞭な變異たるものと信じてゐる。之はデイナル型と呼ばれてゐるが、その主要な特徴として通常のアルプス型よりは身長が高いと云ふ事が云はれてゐる。身長が不確かな規準だと考へるリプレーは、此の型のものを細分類する必要があるものと考へてゐる。我々が現在持つてゐる知識に於ては、此の型のものがアジアに存在すると云ふ直接的證據がある様にも思はれない。尤も、分折を更に進めて行けば、此の型のものが存在すると云ふ可能性はある。

更に一層重要な型はアルメノイドと呼ばれてゐるものである。純粹アルメノイドに於ては身長は中であり、毛髮は殆んど黒く、眼の色は通常褐色である。鼻は極めて大きく頭は後部が平たくなつて居り通常極めて高い。眉峰は屢々大きく發達して居る。此の特徴はダツクワース⁽⁴⁾がシリヤからとれた頭蓋骨を吟味してゐる際に發見されたものであり、私もサイブラのラピトスで發掘した青銅器時代の頭蓋骨に於て極めて屢々觀察した所のものである。此の型のものは東ヨーロッパに發見され、極めて重要な要素を成してゐる。而して恐らく西部アジア住民の原住種族と看做されよう。其れは古代キシに起り、今日ではメソポタミヤに發見されるが、更にインドにも延びてゐる。其れは又中央アジアの住民の一部を形成してゐるが、眞のアルプス族が住居してゐる北部アジアに存在するとは考へられない。

絶對的な正確さを以てアルプス人種から出た之等異つた分岐種族、或ひは一、二の他の部類を認識する事は屢々可能であるけれども、その人種學上に於ける正確な價值については極めて疑はしい様に思はれる。地方的變異が特殊な環境的條件によるものであるか、或ひは何か孤立的な原因が働いて長時間の間にそれ等を分化したのであるかどうかについて確定するには現在充分な資料が存在しない。

第三節 黄色人種

我々がアジアで逢着する大種族集團の第二のものは所謂、黄色人“Yellow Man”と呼ばれるものである。之等のものは通常、蒙古族或はモンゴロイド族、時には非精密な用語でモンゴールと呼ばれてゐるものである。此の命名は極めて不十分なものであり、それは實際、成吉思汗とか忽必烈汗とかの或首長の軍略的天才が優れてゐた爲に、大なる範圍に渉る人種集團を轉々し、其の中にはカルマツク族、ブリアート族等を包含してゐるのである。

支那にマルコポーロが來た時分に忽必烈が支那を統治した事實の爲に、其の名は密接に支那と聯關を持つてゐる。それ故忽必烈が支配してゐた支那人が最も典型的な蒙古族であるとして屢々擧げられる事となつた。然し乍ら、蒙古語を話す或る種族、例へばブリアート族、モンゴール族、カルマツク族等は東部アジアの大種族に屬してゐる一方、他のものは最も密接にヨーロッパの種族に親縁關係を持つてゐるやうである。之等の者が漂泊的種族である爲に、人種雜交が行はれたのであり、リプレーカ極めて明確に示した如く、其の種族名及び言語が内體的諸特徴と撞着したのである。それ故我々はアジア型種族を記述するに際しては、動態的種族名を用ひてゐるのであり、歴史的にも言語的にもモンゴールと云ふ誇らしげな名前を呼び得る數多くの種族が體質的にはモンゴロイド族であるけれども、他方では彼

等の中多くのものは幾分此の血を引いてゐると云ふ事實を漠然たらしめてゐるのである。然し乍ら其の命名は決定的な意味を受け入れて居り、假令その主張を不明確なものとする傾向があつても其の様な呼名を全く避けることは難しいやうに思はれる。モンゴール族の現實に持つ人種的特性が論ぜられる時に此の全問題はヨリ單純となるであらう。

此の第二の大アジア人種は上述の諸人種との對比に於てまさしくアジア的と云はれてゐる。此のものは多くの點で最も典型的なアジア型である。而も之はヨーロッパにも侵透してゐる。

最近ブタペストの蒐集の中に含れる數多くの頭蓋骨を吟味した時に、私は随分數多くの頭蓋骨が通常ヨーロッパ型よりは寧ろアジア型と關聯を持つ特徴を有して居り、之等のものが西ヨーロッパから來れるものと強度な對照を成してゐると云ふ事實に驚いたのである。

一般的規準として黄色人種に屬する人種は短頭型であり、屢々際立つてそうなのである。

ライヘルは綿密な研究をやつてゐるが、彼が吟味せるアジア的短頭種族の頭蓋形態、及彼が比較規準として採用せるアルプス型に屬するデイゼンテイス頭蓋骨に於ける際立つた差違を示す事には失敗した。だが然し、彼のアジア的頭蓋骨の中のあるものは、黄色人種よりも一層ヨーロッパ人種に近いもののである。他方、彼の支那の頭蓋骨は確かに黄色人種中適切な代表型である。二つの大種族間の頭蓋形態に於る相似は、疑ひもなく頭蓋形態の基礎の上にニグロと地中海人が分類されたと殆んど同様な方法で、多くの觀察者が此の二つのものを分類し勝ちであつた理由である。

然し乍ら顔の型を比較基準として採擇する場合には立ち所に兩者の差違は判然として來る。大抵黄色人中すべてではないけれども觀骨の幅は平均的なヨーロッパ人程大きくはない。尤も、アジアの極北に住むものは絶對的にも大きな顔幅を持つてゐる。顔幅は實際よりも絶對的にも相對的にも一層はつきりしてゐる。觀骨は深さも強さも兩方共充

分に發達してゐる。之は多くの支那人の顔の持つ顯者なる特徴たる著しい平齶さに依るものである。觀骨は極めて大きな幅と強さを持つほど、充分發達してゐる。凸な顔面を表してゐる代りに寧ろ偏平な容貌を呈してゐる。

顎骨の一般的構造も亦異つてゐるやうで殊に地中海型とは異つてゐる。地中海型では大低の力は顚顚の筋肉に依存してゐるのであつて、其の原は顚顚の筋膜と小窩とから、即ち頭の拱狀部から發してゐるのである。それは内面と嚙狀過程とに固着してゐる。此の様な状態は顎骨の上下運動に大きな力を與へる。それは頭蓋窩際の外側をともしれば壓塞する傾向を持つてゐる。黄色人及白色人のある者に於ては、咀嚼の主要な筋肉は咬筋肉である。此の筋肉は其の源を顎骨の頰部過程から發して居り、分岐下顎骨の外面のアングル部分及ヨリ低い部分となつて着生してゐる。

之等二つの集團の筋肉組織が大なる範圍に涉つて補完的である事が判るのであるが、ある種族に於ては、一は他より良く發達してゐると云ふ事が通例見出される。下顎骨の癒着點は同一人種に於て亦充分發達して居り、顔の下部の筋肉の發達は殆んどあらゆる支那人に容易に觀取される所である。

顚顚の筋肉による緊張は多小共直接に上向きを呈してゐる。咬筋によるものは顔全體に涉つてゐる。黄色人は筋肉型の人間として記述されるであらう。ある特殊形態を持つ黄色人（エスキモー人）の中には顚顚筋と咬筋とが等しく高度に結合してゐる。

鼻の形態は黄色人が等しく特徴とする所である。ヨーロッパ人種にあつて鼻骨は前額骨との結合によつて壓へ付けられた形をなしてゐるが、アルメノイド族の場合では直接に前額骨に續いてゐる。どちらの場合に於ても鼻骨は相互に比較的銳角をなしてゐる。通常、典型的黄色人に於ては鼻骨の窪みが鼻額縫合點以下にあることが見える。鼻骨も亦開いたアングルを爲して居り、鼻の峯の頂は平たくなつてゐる。

支那の各地に見出される相當多數の支那人の骨を吟味して見ると此の種族に關聯を持つ様に思はれる所の別の特徴を表してゐる。踝點の骨の一つたる距骨の特殊なる形態がそれである。だがその相異はこゝで論ずるには餘りにも技術的なものである。然し乍らその差違は、唯骨のみの證據に基いて考へるならば、黄色人には決定的な人種的地位を與へるに充分なものである様に思はれる。だが然し、次の事は記憶されねばならない。諸々の特徴の中のあるものは窮局的には環境的諸條件と相關々係を持つ人間形態の變異たること、之である。

我々が外面の特徴に眼を留める場合には、黄色人が多くの點で先に述べた人種と異つてゐることが判る。先づ第一に毛髮は形に於ては實際に直毛で黒色である。身體には殆んど毛がない。鬚髮はたまさか、まばらにあるだけで、殆んど無いと云つた方が宜しい。勿論黒い毛髮は黄色人に限られてゐる譯ではない。直毛の人種は他の者にも見出される。然し乍らアジアに縮れた毛髮の者が存在することは黄色人とは異つた系統に屬する血が混入してゐることを示してゐる。毛髮は非常に品質粗剛のものとも云へぬし、しなやかでもない。

皮膚色には可成り相違がある。實際には常に黄色い影が現れてゐる。最も明るいものですら、通常極めて青白い蔭紅花色を呈してゐる。

各々複合せる色の者は各種黄色い影のものから暗褐色の者に至るまで變化があり、時としては極めて暗色を呈してゐるので黄色の色とは殆んど見えないものすら存する。熱帯種族の或る者の中には褐色が殆んど綠色の色を含んでゐる。太陽光線に曝されてゐる者と曝されてゐない者との間には通常大なる對照を爲してゐる。曝されてゐない種族は黄色の影が一層判然として居り、炎天に曝されて勞働する苦力^{カワカ}は上流階級の者よりはヨリ一層暗色を呈してゐる。皮膚の色は北部よりは南部の住民の方が暗色を呈してゐる。黄色人は南部印度やセイロン島の住民ほど暗色ではない

が、最も明色なヨーロッパ人種明るい肌色も持つてゐない。

眼は通常褐色であつて、暗褐色と淡褐色との間の種々の程度がある、眼の白みには通常色がついてゐるが、ニグロの場合は殆んど之がない。

眼の形態は極めて興味ある二つの特徴を現してゐる。第一の特徴は斜眼であることで、之は決して等しく認められると云ふものではないけれども、極東に於る人間の顔を表現するに際して分類さるべき充分に顯著なる特徴である。

第二の眼の特徴は所謂、蒙古の皺である。此の特徴は眼の内角を被ふ皮膚の折目によるものである。或る場合には、眼の全内部の隅を被ひ、低い。眼瞼以下に數ミリメートル顔の皮膚を接ぎ合せてゐる大きな半月形の折目がある。他の場合には、其の折目が丁度眼の内角を被ふ細い圍ひに迄引下つてゐることがある。

此の折目はヨーロッパの子供に現はれて居り、時には大人ですら現れてゐるものもあるが、黄色人に現れてゐる繁度が高いと云ふことは矢張り人種の特徴として認める方が正しいであらう。以前には鼻形指數が黄色人種の適切な規準と考へられてゐたが、後の調査は之が必ずしも適切なるものではないことを示してゐる。

黄色人の分類は我々が前章で考察した人種の分類程明確に定義されてゐるのではない。頭形指數は我々には充分な分類基礎として考へられない。多くのアジア住民の中には極めて高い頭形指數を持つた者がゐるが、實際には其の者はアルプス型に屬してゐるのであつて黄色人に屬してゐるのではない。一般的規準として、黄色人の頭形指數を中心とする微細な高低値が求められるのであるが、而も殆んどこの者は、80に近い數値を示してゐるのであつて、此のことから黄色人が殆んど分化し居らざることを我々は知ることが出来る。

然し乍ら極めて大雑把に云ふならば支那人を其の典型的例とする人種に分割されるものと考へられる。之が又分れ

て種々の分岐種族を生ずるが此所ではそれを詳説する必要はない。所で今我々の研究目的上重要なものは、シエズツ
プ探險隊に依つて強く主張された説であつて、それに依れば、シベリアの或る北部種族は其の根源に於て決定的にア
メリカ人であり、初めアジアからアメリカに横断した種族の反流を表してゐると云ふのである。

之等の住民達はハツドンがパレアンと云ふ便利な名前を與へた南部諸種族の例と異つてゐるのである。其の最も顯
著なる特徴は額幅が極めて廣いと云ふことである。之はアルプス型のあるものに現れてゐるけれども、パレアジア人
に於ては、パレアンよりも一層大きなもののやうに思はれる。

之等北部住民の眞の特性は額幅によつてよりは寧ろ額幅の測定によつて與へられる。そこで此の住民集團を最も明
確に識別するに役立つ特性は通常の觀察に於ては殆んど示されることなく、個々の現實の住民とか、寫真とかに於て
極めて明確に現れてゐるのである。

第二の特徴は之等北部住民の身長が極めて低いことである。之は恐らく之等の住民及び其の祖先達が長期間に涉
り、困難な氣候條件の下に生活して來たことに關係を持つてゐるものと考へられる。通常鼻形指數は低く、若し前述
の理論が果して眞なりとせば、之も、環境に歸せしめうるものと考へられる。而してそれは彼等を極北的條件に應じ
て特殊化された黄色人の一類型として分類する事に役立つものと考へる事が出来る。

皮膚、毛髮、眼等の色及び毛髮、眼の形態はパレアン族と殆んど異つてゐるやうには思はれない。

支那に居住せる廣大な人口には随分數多くの變種があると考へられるが、二つの類型に之を分けることは妥當であ
らう。ハン型とサン型とが之であつて、之は北支那、南支那の二地域を大體占めてゐる。私は唯、黄色人の眞の代表
者であると考へられ得る支那帝國の住民をのみ含めてゐるのである。

北支那人、即ち「ハン型」は其の最も顯著なる特徴として、身長が高いと云ふことが人種の特徴である。北支那人は南支那人に比べて頭が輕微乍ら長いが現在之がどれだけ正確なものであるかについては不定である。顔幅も寧ろ南支那人よりは廣いようである。

南支那人、即ちサン型は北支那人よりは背が低い。色はヨリ暗色を呈して居り、鼻形指數は高い。どちらかと云へば短頭型である。南支那人と北支那人を區別する規準は現在の所身長と鼻形指數とに求められる。之等の二つの特徴は環境と相關々係を持つてゐるやうに思はれるが、支那住民を二分割する便利な方法であると考へられる。よく云はれる事であるが、支那全土の住民は殆んど同種であつて、たとへ外部から侵入者があつても之等侵入者はこの支那人の環境的條件に吸收されてしまふ。然し乍ら北支那に近くなり、更に進んで北に行くにつれ、所謂ハン型が多くなり之と反對に南にはサン型が多いのである。古來、支那には疫病、洪水、戰亂等により北から南へ、南から北へ廣範な移動があつたのであつて、南に北支那人型が居り北に南支那人型が居り、其等が雜交してゐる。而も尙之等の二つの型が認められるのは環境的影響を受けてゐることを證左してゐるのである。この二つの特徴の差は人類學者にとつて誠に輕視する事の出來ぬ重要性を持つてゐるものである。

黄色人の大集團の範圍内之に次ぐものとしてはヘッドンが原始マレー人と記述した種族であつて、現代に於ては特徴化されたマレー族が之である。之等の住民は南東アジア及諸島に廣く散在してゐるのであつて、通常丸型の頭であり、相對的に云へば廣いけれども近隣ネジオット族に比較すれば狭い鼻を持つてゐる。毛髪や眼は支那人と異つてはゐない。通常、身長は低く、皮膚は時として鈍い暗黄色を呈してゐるけれども、屢々煤けた黃褐色を呈してゐる。頬骨は支那人程際立つてはゐないし、顔も強く發達して居らない。大部分の者は北方人程筋肉の發達はなく、一般に

一層薄弱な組織を持ち、顎は小さく支那人に特徴的な咬筋肉の發達は見受けられない。

アジアに發見される第三の種族は通常ネグリート族10の10として知られてゐる。之等の者は現在アジアの外圍地域に居住して居るが、或る時期には、現在居住する所よりはヨリ廣大な南東アジアの部分を含めてゐたと考へる事は、さう不適當な推論でもないやうである。そこで、之等の地域によつて考へて見れば自ら其處に次の如き三つの地理分布が出て來る譯で、マレー半島、フィリッピン群島、アンダマン群島が即ち之である。スマトラにはネグリート族の血を受けたものが多數存在し、同様に佛領印度支那の住民についてもその様な報告が爲されてゐる。然し乍ら上述せる三分布地域を除いて現在アジアには集團として存するネグリート族は最早存在しない。

ネグリート族は短頭の傾向があり、低身長の特徴を持つてゐる。然しこの二つの特徴は何れも近隣諸種族との分類規準として絶對的價値を有しない。一層原始的種族の中には身長は低いからである。中頭形指數は又多くの黄色人の一つの特徴である。暗色の皮膚を呈してゐるが、一見すると良い指標の如く見えるけれども、殆んど役に立たない。マルチンはマレー半島内部の原始種族は殆んど暗色を呈して居るが、殆んど差違を見分け難いと云つてゐる。之は風土的條件の影響として考へて宜しからう。之等の條件は之等の異つた種族間の複合を惹き起す傾向がある。

然し乍ら、フィリッピンに於てはマレー半島に於るマルチンの經驗とは反對に、皮膚色と身長とは爾餘の住民に比べてネグリート族に顯著なもの如くである。ネグリート族はヨリ黒く、又身長も可成り低い。此の身長の違いと云ふ事はネグリート族の特徴の一つであるけれども、それはネグリート族と南東アジアの褐色又は黄色人種のあるものと區別するのに絶對的に役立つのではないと云ふ事が現在の證據から暗示される所である。

鼻形指數10は一つの確かな規準を我々に與へるものではない。此の場合非常に興味あるのは其の範圍である。一

般的規準として考へると、ネグリート族は恰も最も廣い鼻を持つてゐるものゝ如くであるが、ネジオット族はそれより僅く微少に狭い鼻を有してゐる。マレー住民となるとそれよりヨリ狭く、以前に主張された假定にして正しいものとするならば、鼻形指數は環境との均衡關係に次第に這入り込んで來てゐる事が指示されてゐるのである。但し其の適應過程は緩慢である。極めて長期間、極熱と高濕に曝されて來た種族は之等の諸條件と密接な關聯を持つ極端な指數を示してゐるのである。

ネグリート族と其の近隣諸族との間にある最も顯著な差違は毛髮の形態である。それは平たく、部分的にはリボンの様であり、頭の上にちんまりとカールしてゐる。彼等は屢々鬚鬚を有してゐる。

此の特徴がネグリート云ふ名前を獲得するに至つた由縁である。ネグロ族も毛髮及び皮膚の相違に従つて東アジアのネグリート族と中央アフリカのネグロ族との二つに分れる。

此の二つの集團が分布してゐると云ふことは困難な問題を提供してゐる。現在ネグリート族は其の特質を持つてゐる地域内に附屬的分布を占めてゐる。以前にはもつと廣大な地域を占めて居り、元々の發生地は現在の地域の中央部か、或はアジアの本土に占めて居つたものと考へられる。ヴェルノーによつて彼等の痕跡があると報告されてゐるけれども然し今日、本土には集團として存在して居ない。ボルネオ島には何等の痕跡が發見せられなかつたけれども、之はさして重要な問題ではない。ジャバ島は我々に何等證左となるやうなものを提供しないけれども、更に此の島から何等かの知見の得らるべき事は可能である。スマトラにネグリート族の痕跡があるかも知れぬと云ふことは不可能な推論ではないやうに思はれる。然し乍らマレー半島の西部及びベンガル灣内の西部島嶼には何等の痕跡をも認め難いやうである。現在、我々はこの方面に於る種族を明確に一線を以つて色分けする事は可能でなく、通例オセアニア・

ネグロと云ふ名で呼んでゐるけれども、之は一に將來の調査研究の成果に俟たねばならない。之についてはジョイス(J. A. Joyce)とマルチンの論稿がある。ジョイスは「マダガスカルに住民は元來オセアニア・ネグロイドである」と云つてゐるが、之丈では、二つの集團を關聯せしめる役目を果すものではない。

マルチンは

「マレー半島のネグリート族と其の近隣族との間の最も重要な差違は毛髮形態の差に求められる。」と考へた。我々は毛髮形態が人種區別の適切なる規準と考へて來たのであり、多くの場合確かに其のやうに考へられてゐるが、褐色人種の分派の毛髮と其の近隣族或は親族關係を持つ種族の毛髮との間には相當の差が認められるのである。之等の差違は大部分、一定の風土的條件と關聯あるものの如くである。それ故、ネグリート族と眞のネグロ族との間に發見せられる毛髮形態の相似が親縁關係に基づくのではなくて、寧ろ同様な地理環境の影響に基づくものと考へることは少くとも妥當であるやうに思はれる。トムソン教授は、ネグロの毛髮形態は頭を熱帶太陽の激しい光線から保護するのに特別の利益を持つてゐると私に話した事がある。疑ひもなく熱帶地域に住む總ての住民は、之等の特異原因を發展させなかつたけれども、アフリカ及びその他のネグロ型が特にその厳しい環境に適應されたとする事は妥當であらう。我々は顯著な特徴原因に對する親縁關係ではなくて同様な環境の効果に寧ろ注目しなければならぬのである。アジアの人種を考察するに際してこの事は依然として可能である。何故ならばアフリカのニグロは一定の極めて顯著な特徴を現してゐる様に思ふけれども、アジアに於てネグリート族とその近隣族との差違は毛髮の特徴を除くなら何處に於ても顯著ではないからである。

問題の解決は依然として探求されねばならないが、ネグリート族とアフリカニグロとの間の親縁關係を發見する人

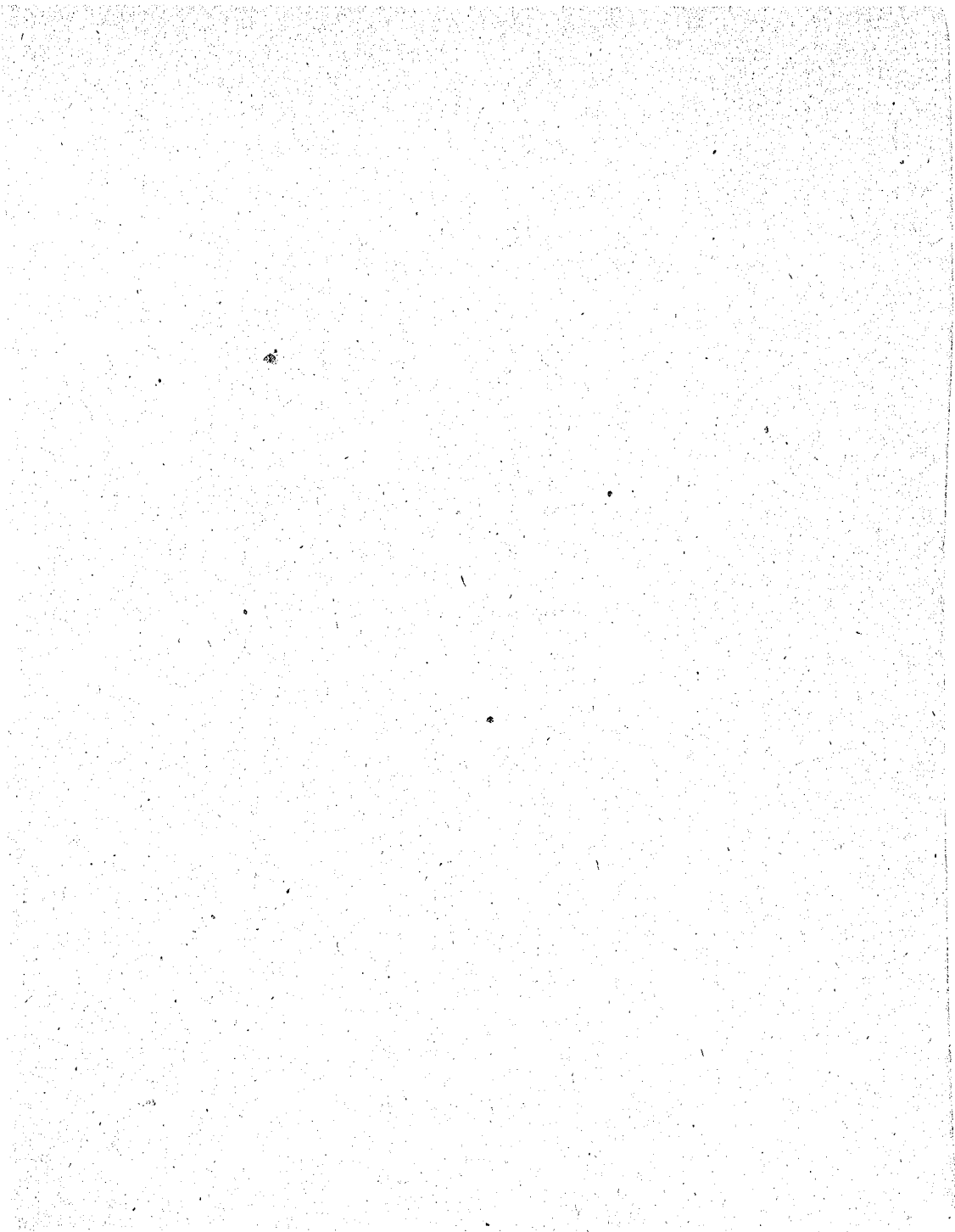
は二つの特殊化された地域を結合する化石人を探し求めねばならぬ様に思はれる。複合説を支持する人は、人間の毛髪質がどれだけ環境と相關々係を持つものであるかと云ふ事に付いて正確に跡付けねばならない。熱帯が人種とは全く獨立な人間の構造に何か極めて決定的な効果を持つと云ふ事實に鑑みて、後者が最も容易な假説なりとする事は可能の如く思はれる。

情、アジアの人種を要約するならば、先づ第一に西部アジアの北方型である、之は極東のアイヌを含んでゐる。第二に様々な褐色人種集團が擧げられる。第三の集團は中央ヨーロッパのアルプス人種に近い種々の亞人種である。第四に人種的親縁關係が未だ充分に研究されていない人種集團たる黄色人がある。之は恐らく二、三の亞種族に分類されるであらう。最後にネグリート族である。少數にして大部分は南東熱帯アジアのあちこちに住んでゐる孤立種族である。

第二章 關係文獻

- (1) Kearne, A. H. *Stanford's Compendium of Geography and Travel Asia* (2 vols.), Lond., 1896.
- (2) Brit. Mus. *Handbook to the Ethnographical Collections*. [T. A. Joyce.] Lond., 1910.
- (3) Hogarth, D. G. *The Nearer East*, Oxford, 1902.
- (4) Little, A. *The Farther East*, Oxford, 1902.
- (5) Czaplicka, M. A. *Aboriginal Siberia*, Oxford, 1914. [Summarizes Russian Literature.]
- (6) Buxton, L. H. D. *The Eastern Road*, Lond., 1924.
- (7) Richards, L. (S. J.) *Geographie de l'Empire de Chine*, Shanghai, 1905. [Eng. Trans., Kennelly, 1908.]

- (8) Broomhall, T. H. (Editor). *The Chinese Empire*. Lond., 1907.
- (9) Richthofen, Freiherr V. *China*. Five vols, Berlin, 1877-1911.
- (10) Holdich, Sir T., *India*. Oxford, 1902.
- (11) Czaplicka, M. A. *The Turks of Central Asia*. Oxford, 1918.
- (12) Haddon, A. C. *The Wanderings of Peoples*. Camb., 1911.
- (13) Hrdlicka, A. *Amer. Journ. Phys. Anthropol.* Washington, 1920, III. 4.
- (14) Zwaan, K. de. *Die Inseln Nias*. Haag, 1914 (2 vols.).
- (15) Giuffrida-Ruggieri, V. *Prime linee di un antropologia sirtemica dell' Asia*. *Archiv. Anthropol. Enol.* Florence, 1917, XLVII. also issued separately. Engl. Trans., Univ. of Calcutta, *Anthropol. Papers*, 1921, VI.
- (16) Fleury, H. J. In *Eugenics Review*. 1922, XIV. 97.
- (17) Smith, G. Elliot. *The Ancient Egyptians*. London and New York, 1923.
- (18) Baur-Fischer-Lenz. *Grundriss der menschlichen Erblichkeitslehre and Rassenhygiene*. 1923
- (19) Günther, H. F. K. *Rassenkunde des deutschen Volkes*. Munich, 1924.
- (20) Duckworth, W. L. H. [Note on 2 skull from Syria.] *Studies in Anthropology*. Camb., 1911.
- (21) Haddon, A. C. [The pygmy question] in Wolfaston, A. F. R. *Pygmies and Papuans*. Lond., 1912.
- (22) Martin, R. *Pie Inlandstamme der Malayischen Halbinsel*. Jena, 1905.
- (23) Sullivan, L. R., in *Mem. Bishop Mus. Honolulu*, 1923, IX. 211.



第三章 アジア諸人種の起源

先の章に於て考察したのは現在に於るアジア人種の形態と分布状況であつた。之等の人種の起源を尋ねることは人種學專攻の學徒にとつては最も興味ある問題である。特に、アジアを研究の對象として撰んでゐる場合にはそう云へるのである。其所で我々は此所に其の問題を検討して見たいのであるが、何分にも此の大陸の廣がり巨大であり際限もないのであるから、殆んど此の方面に關するアジア住民の研究に關する正確な知識は得られまいと考へられる。

一八九一年にジャバ島トリニルに於てデネボアが直立猿人の化石を發見した事が動機となつて、人類と高猿類との間に何等かの關係を見出さんとする研究に刺戟を與へた。それに對して種々の結論が與へられたが、次に述べるものは特に記述するに價するものであらう。ブウル(M. Boule)は *Les Hommes Fossiles, Paris, 1921* に於て次の如き見解を持してゐる。直立猿人は現實には巨大な手長猿であり、人間に似てゐる特徴は複合に基いてゐる。即ち斯く解すれば、猿の先祖と人間の頭を有する頭蓋穹隆部、直行大腿骨、齒質等の中間的特徴を考慮するに最善の道であると云つてゐる。所で之迄の發見は不幸にも骨格の三部分に限られて居り、其後繰返し行はれた調査も更に此の問題に光明を投げ與へるべきものとは發見せられてゐない。

所で次の事項には特別の注意を引くものがあらう。其の頭蓋穹隆部容量は之迄評價されて來た所では人間と猿との中間的特徴を持つてゐる。アースキーヌ卿によれば、其の前頭部は人類と云ふよりは寧ろ猿類に屬するものである。後頭部の位置は中間的であるけれども、一般的に云へば、手長猿とチンパンジーのそれに相似してゐる。エリオット

・スミスによれば、其の頭蓋内部の形は特徴に於ては人間に屬してゐるけれども、前額部は猿類のものである。

舊石器時代人がアジア大陸に居住してゐたと云ふ事を證明すべき痕跡が數多くある。ラールテ(Later)は一八六四年に舊石器時代人がシリヤに發見されたと報告して以來、數多くの發見が西部アジア、特にシリヤ及びパレスチナで爲されて來た。其等は氷河期の動物と一緒になつて發見されたのであるが、其の器具形態はヨーロッパの其れと一致してゐるのである。ブウル(B. Boule) モンタニアン(Montalian) チェルネアン(Chellean) アッシュレアン(Achulean) ムステリヤン(Mousterian) オウリニアン(Aurignacian) 及 マダニヤン(Magdalenian) 型が發生してゐると報告してゐる。人間が此等の器具を作つてゐた頃に、氷河作用は高山の傾斜面や高原地域に依然として延びてゐたやうに思はれる。尤も小アジア地域やペルシヤでは此等の現象は殆んど見受けられない。然し一方平原では舊石器時代と新石器時代との兩方の堆積物を包含してゐる。

數多くの舊石器時代の堆積物が印度に於てパンジャブ地方からマドラス地方にかけて發見された。其等は古代動物と關係あるものであり、而して印度に於る考古學的問題は極度に西部ヨーロッパの其れに似てゐる。ロシアの考古學者は北部アジアに於て又舊石器文化段階に屬する人類がエニセイ狹谷に居住して居つた事明かであると云ふ。然し氷河作用はヨーロッパに於るほど大規模なものではなかつたやうである。

イルクツク地方からとれた新石器時代の殘片は緒土で被はれてゐるので興味深いものがある。然し現在の處、特別の意義を此の奇妙な一致に對して持つものではない。

日本の貝塚やその他の前史殘存物は我々の問題に何等の光明を投げ與へてゐない。何故ならばそれ等と既知の事實を結びつける事が可能である所には、此等の地域に現在住んでゐるものに近いものとなる様に思はれるからである。

此の事に關する論議は之等の種族を取り扱ふ種族に於て見出されるであらう。

現在西部、北部及南部のアジアには初期の人間が居たと云ふ證據が存在する。極東からとれた文化的な證據は現在疑はしいものであるし、亦、左程價値のあるものではない。ヨーロッパに於る大抵の發見が極めて最近のものであり、亦先史考古學が如何に再述されたかを記憶する場合、最近二十年間に於てすらその證據の特質が疑はしい事が立ち所に明らかなるものとなる。

種々の古代發見物が支那に於る黃土からの判斷によつて報告されたのであるが、其の中最も重要なものはテラー^(P. Teilhard)によつて記述された黃河のオルドスの遺跡である。五つの異つた位置が舊石器時代の殘片物を含んでゐると云はれてゐる。之等のものは北部廣西省に於るニンシャであつて、そこではその型はムステリヤンと云はれてゐる。第二はスヤラのオンゴールで、第三はユーフエン、第四はキンヤン、第五はシーツイツエで發見される。

私はアングーソン博士及その他の人々の好意によつて、支那に於る所謂石器時代の殘存物を數多く吟味する機會を持つた。其れ等のものはヨーロッパで用ひられてゐる色々違つた名前で屢々記述されてゐた。だが慎重に吟味してみると、此の記述は全く誤謬であつた事が判つた。然し乍ら之等のものは支那の銅器時代に屬してゐるのであつて、その銅器は明かにアナウからとれたものと同一の型を示してゐるのである。

南方及印度支那のものだと主張されてゐる發見物は共に疑しい性格を持つてゐる。色々證據を要約するならば、シベリアの發見物に重點を置き、廣西からとれたものに疑念を抱いてゐるけれども、我々は北方の初期の人間に就いては何事も知らないし、又報告された發見物も依然として困難な問題を形成してゐるのである。

人間の製作物の證據が極めて疑はしい場合に、その骨が一層眼に止らないと云ふ事は自然である。直立猿人はさて

置き、アジアに於る初期の人間に就いて二つの明瞭な報告書が提出されてゐる。

第一のものはオウリナシヤ期に屬するものと言はれてゐる。それはベニシアのアンテリヤスの洞窟の中でゾモフェンが發見したのであつた。完全に形態學的な報告書は何等出版されて居らない様に思はれる。(10)

第二のものは一九一五年(11)松本博士に依つて記述された薦骨である。その骨は河南省に於る古代の堆積物から齎された。その形状及彎曲の基礎に立つて松本博士はそれがネアンデルタールロイドであるとしてゐる。薦骨に生じてゐる變異を考察し、既に公にされた數字から判斷してこの薦骨がネアンデルタール人の代表型に屬すると云ふ事を形態學的基礎の上に主張する事は、極めて危険なもの様に思はれる。ブラツク博士の報告書が出版される迄は、銅器時代の河南省に於る初期の人間の正確な形態が何であつたかについては、主張し得ない所である。地理的證據はさておき、その結び付けは疑しい。然し乍ら、地理的な證據も亦極めて疑しいものである。松本博士はその發見のなされた方法に關しては何らのデータも述べて居られず、それが唯手に入つたと述べて居られるのみである。

アジアに於る初期の人間に關する證據は極めて不十分なものである。その大部分に涉つて我々は現在たしかめ得ない。其の大抵のものが僅かに知られてゐるに過ぎなく、或るものは全く知られてゐない状態にある。にも拘らず多數の學者は確心ありげに、人類はアジアに發生したと斷言してゐるのである。ある種の學派、特にマッシュュー(12)はそれが中央アジアの高原地帯だと暗示してゐるのである。所で中央アジアの高原は遠く離れて居り、アジアに於ける中心位置にあるから其の保險調査は急速に進みさうもないと云ふ事實を除いては、此の魅惑的假説を確かむべき證據は殆んどないのである。若し早期の殘存物が其所に發見されるならば探險者にとつて幸運此の上もない。現在の處、調査者にはこの様な報酬が與へられてゐない。

人間が何處で發生したにしても、特にそれが何等か特別の地域に發生したのだと想定する理由は別に何等ないのである。だが學界の意見はアジアに人類發生を見んとし、それもアジア北部ではなく南部に傾いてゐるのが一般である。所で、一方ヨーロッパの諸資料に基礎を置いて考へると、アジアよりはヨーロッパに於てより早く人類が發生してゐると云ふ事を地理的に知り得る殘存物がある。之はヨーロッパがどうしても人間の搖籃地であると論ずるのではない。それは我々に一つの出發すべき地點を提供してゐるのである。更にヨーロッパに於ては後の人類が移動してゐる證據が存在して居り、限られた程度にはあるが、少くもヨーロッパの三大人種史を跡付けることが出来るのである。

其の事情はブウルが極めて明快に記述してゐる。北方種族の現在の分布中心はスカンジナビヤである事は明瞭である。舊石器時代、瑞典は氷で被はれ、彼等は止むなく氷から解放された地域に移行しなければならなかつた。此の地域が、中央・南部及び東部ロシアであつたと考へる事が出来る。トランスウラル地帯はさうではなからう。さて、今まで來て我々は再び眞の證左たるべきものを有してゐないのである。ジュフリダ・ルジェリ⁽¹⁾及びフリーユール⁽²⁾は北方種族は地中海種族の一分岐であると暗示した。之は決して不可能な議論ではないのである。だが此の説を確證すべき證據とてもないのである。ブウルは北方種族又は先北方種族がマダレニヤン時代に存在したと暗示してゐる。

全體として、北方種族はヨーロッパに屬しアジアには屬せざるものとするのが妥當のやうに思はれる。現在、それについて我々は其の判定を與へることが出来ない。然し乍ら、現在の住民が棲息し初めた時よりはすつと以前に既に現在の住民と相當異つた住民が歐亞大陸の北部ステップ地帯や、ツンドラ地帯に散布して居つたと云ふ提案もあるのである。現在北部型に屬する長頭種族の生存者がある。ヨーロッパに於る北方族、アジアに於るアイヌ族トルコマン

族の或るものが即ち之である。之等は相當に違つてゐるのであるが、窺局するに同じ系統に屬してゐると考へることが出来る。所である時期には長頭人種が極めて廣範に分布してゐたことは明瞭である。其の起源は何處であつたかは云ふことが出来ないし、また其の分布してゐた者が全部同一種族である等とは決して言ふことが出来ないのである。日本で取れたアイヌの頭蓋骨及他の前史時代人のそれを試して見ると、北方種族とアイヌ族との親縁關係は屢々提案された程遠いものでないことを示してゐる。

情、そこで次の様に考へる事は可能であらう。即ち分布の中心は東部ヨーロッパと北部アジアにあつたのであつて、其れが二つの方向に分れた。結局一方に行けるものは北部ヨーロッパの背高の明色種族となり、他方に行けるものはゾングリせる卷毛のアイヌ族になつたのである、と。アイヌは殘存種族であり、此の初期の人種から殆んど特殊化されてゐない。彼等の間で一緒に生活して見ると、ヨーロッパの諸族とアイヌ族との親縁關係があることに思ひ付くやうになるであらう。

此の提案は必ずしも北方種族の發生搖籃の地をプウルが提案せるよりは、更に東に移さんとする意味を持つことにはならない。親縁關係を提案することは決して何等かの特別な原生地を斷言することではないと云ふことを記憶して置かねばならない。親縁關係は一つの共通の系統を意味してゐるけれども、其の共通の系統が發生した場所は現在の所全く不定である。而して共通の親縁關係を持つものを一應假定的に認めても、一方斯る親縁關係は充分に證明されてゐるものではない。またたとへ證明される場合ですら、他の背景に立つて主張されたもの、例へば北方人種は相當の昔に歐亞大陸の北部に發生し、爾後全く何等が不明の理由で移動したと云ふ主張を一步も出でないであらう。

新石器時代に於て此の移動が極めて能動的な事は殆んど疑ひ得ないものゝやうに思はれる。北方人種又はその類縁

人種が更に極東に迄延びたと云ふ事はあり得るが決して確實だとは言はれない。現在、それを支持すべき直接的證據は殆んどないのである。當時、北方人種がスカンヂナビヤ半島に蔓延し、其處が彼等の發生地だと云ふ幻想を與へる程、確固たる地位を築いたのである。

地中海人種は一つの異つた問題を提供してゐる。北方人種又はそれに類する人種が少くも此の風土的條件の下で生活する様に特殊化され、全體として南の風土條件に適合する事に失敗してゐるのに對し、地中海人種は南の子であると云ふ事は明らかである。之が同一人種からなる二種族、即ち熱帯又は亞熱帶的條件に適合せる種族と、北部の風土條件に適合せる種族とである事は確かであらう。此の説を支持し又は辯駁する證據を我々は現在有して居らない。然し乍ら、他方長頭種族と互に關聯し合つたと云ふことが問題を包藏する一方、地中海及褐色人種が廣範に分布し、恐らくは多數の亞種族を有してゐる事を暗示する理由が數多く存する事は今迄示されてゐたのである。之等のものは蘭領印度からジブラルタル海峽に至る迄分布されてゐる。彼等は前王朝時代の埃及に見出され、之迄、メソポタミヤ地方に於て慎重に試されて來た最も早期の墳墓となつて現れてゐる。然し乍ら、之は總ての近代史に屬するものである。我々の人種起源探求に於て、それは僅か昨日起つたことの様之感ぜられるに過ぎない。ヨーロッパからとれた多くの早期頭蓋骨の中の或るものは明かに此の型に屬してゐる。我々が云ひ得ることは斯うである。即ち永劫の時代より人類が地上に登場して以來、此の型の人種が、大陸の西部及南部沿岸に沿つて散布して居つたと云ふことである。だが其の搖籃地が何處であつたかと云ふ事を示す證據は遺憾乍ら何等ないのである。

地中海人の起源に就いては、上述したのとは異つた起源を暗示する二三の提案が今迄爲されて來た。例へば、ジュフリダ・ルヂエリ(41)は「此の人種はクロマニヨン種族と始エチオピア種族との混合物によつて作られた。」と考へてゐる。

る。此の説の難點はクロマニヨン種族の眞の性質に關して殆んど證據がないと云ふこと、而して原エチオピア種族に關しては更に殆んど何物もないと云ふことである。何れにせよ、之は現在の褐色人種の分布を説明して居らないし、又同様の主要特長を備へて居り乍らも、どうして色素に於ける現在の顯著なる相違を生ずるに至つたのであるかについても説明する所がないのである。

著者がアルプス人種、ダイナール人種及びアルメノイド人種に分割した短頭型種族集團は一般に其の根源をアジアに有するものと認められてゐる。プウルは西方への種族移動が恐らく氷河期の始めの頃、アルプス人種は西方に進むにつれて其のモンゴロイド的特徴を漸次喪失するに至つたものであると提案してゐる。尤も此の過程がどの様に經過したかについては彼は説明して居らない。

初期のアルプス人の前進が他の住民の中に滲透する程多量の移動でなかつたらしく思はれる。然し乍ら、青銅器時代になると彼等は確かに西部ヨーロッパに大いに滲透してゐたのであるが、それより以前には埃及の王朝期²の初めに近東に滲透してゐたのである。情、其所で、彼等は少くもアジア及びヨーロッパに於て初期の近代人類の代表者ではないのであるから、上述した所とは多くの點で異つた問題を提供してゐることになる。今日我々はアルプス人種がアジアに廣く分布してゐるのを見出すけれども、其の到着は早期ではなかつたやうに思はれる。ヨーロッパでは彼等は本質的に山の子である。彼等がアジアに發生したと云ふ事は現在我々が持つ證據から引き出され得る殆んど唯一の結論であるように思はれる。其の黄色人種との關係は多くの反對意見の表明あるにも拘らず、今日明瞭に理解されてゐない。若し我々が頭形指數に最高價值を認めるならば（尤も多くの人類學者はその價值について極めて懷疑的である。）我々は恐らく兩人種の類似性を知るのであらう。之以外には黄色人種とアルプス人種との間に緊密なる連續關

係がある事を主張し得ないこと明瞭である。

我々は未だ黄色人種の起源に關する何等の知識も持つて居ない。アジアの中央は未だ充分に探査されてゐない地方であり、現在此の型について發見せられた最も初期の殘片物ですら大古代のものには屬して居らないやうに見える。上述せる如くアルプス人種が其の起源に於て黄色人種と關係を持つてゐるかどうかについては我々は興り知らない。黄色人種の初期の形態に關して此處に考察を必要とする一點は其れと新世界アメリカの住民との關係如何である。

アメリカ種族の起源は多くの論議の種であつた。多くの人類學者達は(特にヒルドリツカ⁽⁹⁾(A. Hrdlicka)に於て顯著に)アメリカには初期の人類の痕跡は何等存しないと信じてゐるのである。

然し乍ら、何故にアメリカに於る初期人類の殘片物が何等かの古代に屬さず、同時に近代的インディアンに可成り似てゐるのであるかと云ふ理由は何等存在するのではない。今日北東アジアに於ては後章に檢討する如く近代的アメリカ種族と緊密に相似してゐる住民が存在してゐる。此の相似は彼等が其の近代の後裔になつても殆んど異つてゐない共通の祖先を持つてゐたのだと想像することによつて、恐らく最もよく説明され得るであらう。成程今日のアメリカ種族は頭蓋形態、色、身長等々の點で一定の相違あることを示してゐる。だが然し、之等の相似は、一方にはヒルドリツカをして彼等が同一人種に屬すべしと思はしめ、他方にはアメリカに於て若干の顯著なる人種型が存すると考へさせる量のものである。とも角、今日一般的にはアメリカ種族と黄色人種との相似が其の同一種族基に屬する事から來てゐるものに相違ないと云ふ意見が容認されてゐる。其等のものがアメリカに發生したと思惟さるべき證據は何等存しないのであるから、彼等がアジアに發生したものとすることはあり得べき見解である。然し乍らベーリング海峡の近隣で二方面に若干の種族移動があつた事が考へられ得る。アジアに於る現在の住民はそれ故、其の起源をア

アメリカ大陸に負ふてゐるかも知れないがそれは第三義的人種播種地として過ぎないのである。

アジアのエスキモー族は數に於てこそ少いが、此の興味ある種族に對して可成りの注意が之迄引かれて來た。アジアのエスキモー族は北アメリカのエスキモー族よりはエスキモーならざる其の近隣種族により密接なる關係を持つて居つたやうである。いづれにせよ、我々はエスキモー族と云へば一方ではアメリカン種族と區別し乍らも、黄色人種を聯想するに違ひないやうである。恐らく其の分化は比較的速い昔に行はれたものらしいが、再び此所で我々は理論の基礎たるべき證據を握つてゐないのである。Chance-Jade からとれた頭蓋骨はテツウ (Tsun) からソラス教授 (22) (Prof. Sollas) に至る迄の觀察者によつて、正にエスキモイドたるべしと考へられた。それ故、我々はアジア大陸の極北東部の住民の原基的祖先はアジアにはなくて、ヨーロッパに見出すべきなのだらうか。

斯る結論は極度に冒險的なものであらう。先づ第一に、單一の頭蓋骨だけでは殆んど頼りになる判斷を下し難いと云ふ事、第二に我々は現在一見してエスキモー族の特徴に似てゐる様に思はれる特徴が現實に斯るものとして考へらるべきであるかどうかを判斷することが出來ないと云ふこと之である。鼻の形態は或る者によつては、エスキモー族との關係を實證する重要な證據たるべく考へられて來たのである。だが極端に寒冷なる風土條件に屬せしめられてゐると云ふこと、鼻の狭さは幅合であつて、關係の問題ではないと云ふ事が想起されねばならない。頭蓋形態も亦同様に考察されるかも知れない。トムソン教授はエスキモー族に於る龍骨狀突起は人種の特徴ではなくて、之等の種族が其の咀嚼器管を尊重する習慣に基いてゐると想定するに適切なる理由を示した。此所で再び我々は何等確かなる證據を持つてゐるものではなく、唯、觀察された事實を記述する事が出来るに過ぎないのである。

我々が現在握つてゐる證據に基いて認められた結論は黄色人種の成員として一括され得る種々の種族が總て恐らく

はアジアに發生したと云ふことであらう。舊石器時代のヨーロッパにモンゴロイド人がゐたと云ふ提案は未だ證明されてゐない。

我々は現在、ネグリート族の起源については何も知つてゐないし、それがアフリカから來たものか、アジアに起源があるかどうか云ひ得ないのである。ニグロ族がアジアに發生したと云ふ信念を吐露する如き決定的證據を我々は現在握つてゐないのである。生物學的規準に立つて主張される議論は、現在純粹な推察に止らねばならない。

そこで、此の章の結論を與へると云ふことになれば大部分純粹に否定的なものになつて來る。窺局の起源に關する證據を握つて居らない爲に我々は明確に斷言する事が出來ない。恐らく黄色人種と少くとも白色人種の一分岐種族は其の散布中心地をアジアに持つてゐたのであらうが、如何なる地點かに就いては現在明記し得ない。然し乍らもつと一般的に言へば、人類の最も初期の播種地がアジアの何處かにあつたとする事は不可能でもななうである。

第三章 關係 文獻

- (1) Boule, M. Les hommes Fossiles Paris, 1921.
- (2) Pumpelly, R. Explorations in Turkestan. Carnegie Inst., Washington, 1904, LXXIII. (2 vols.)
- (3) Savenkov. Congres internat. d'anthrop. et d'archeol. Moscow, 1892, I.
- (4) Baye, J. de, and Volkov, Th. L'anthrop. Paris, 1899, X, 172.
- (5) Hamada, K., and Hasebe, K. Rep. Archaeol. Research, Dept. of Lit., Kyoto Imp. Univ., 1920-1921, IV-V.
- (6) Teilhard, P. L'anthrop. 1923, XXXIII, 630.
- (7) Andersson, J. G. Paleontologica Sinica D. Peking, 1923, I, 1.

- (8) Andersson, J. G. Bull. Geol. Surv. China. Peking, 1923, V. I.
- (9) Buxton, L. H. Dudley. Mem. 1925, XXV. 10.
- (10) Zinnoffen G. I'Anthrop. 1897, VIII. 272.
- (11) Matsumoto, H. Science Rep. Imp. Univ. Sendai, Japan, 1918, III. 36.
- (12) Giuffrida-Ruggieri, V. Riv. Ital Sociologia. 1915, XIX.
- (13) Giuffrida-Ruggieri, V. Riv. Ital. Paleont. 1918, XXIV.
- (14) Giuffrida-Ruggieri, V. A. A. E. 1916, LXV.
- (15) Keith, Sir A. J. R. A. I. 1915, XLV.
- (16) Hardlicka, A. Proc. U. S. Nat. Mus., 1924, LXIII. 12, 1.
- (17) Hardlicka, A. Amer. Anthrop. 1912.
- (18) Hardlicka, A. Bull. B. A. E. 1907, XXXVIII.
- (19) Hardlicka, A. Ibid. 1912, LII.
- (20) Hardlicka, A. Ibid. 1918, LXVI.
- (21) Tastut, L. B. S. A. L. 1889, VIII.
- (22) Sollas, W. J. Ancient Hunters. Lond., 1923.
- (23) Bryn, H. Ymer. 1922, 314.
- (24) Christian, V. Anthropos. 1921-1922, XVI-XVII. 577.
- (25) Christian, V. Mitth. Anthrop. Ges. Wien, 1924, LIV. I.

